

関西学院大学社会学部 50 周年記念事業

関西学院大学社会学部卒業生調査

報告書

2011 年 11 月

関西学院大学社会学部 50 周年記念事業委員会

はじめに

本報告書は、2009年におこなった「関西学院大学社会学部卒業生の生活と意識に関する調査」の調査報告書である。

関西学院大学社会学部は、1960年にそれまでの文学部社会学科、社会事業学科が文学部から独立して創設された。2009年は創設50年目に入る年であり、2010年は創設50周年を迎える年であった。これを記念して、社会学部ではさまざまな記念事業がおこなわれたが、卒業生を対象とした調査も、記念事業の一環としておこなわれた。

今回の卒業生調査では、社会学部の50年の歴史とともに卒業生の方々がどのような人生を歩んでこられたのかを知ることが、一つの大きな目的であった。それを知ることによって、社会学部の歴史を振り返ると同時に今後を見通すための道標となると考えたからである。また学生たちにとって、自分のキャリア、人生を考えるための、先輩たちのよき見本を知ることのできる絶好の機会だと考えたからである。

そのため今回の調査では、職業経歴や家族歴など、卒業生の方々の卒業後の経歴を細かく尋ねることにした。卒業生の中には、こうした個人的な質問に対する抵抗感もあったかとは思いますが、非常に多くの方々に、丁寧に回答いただくことができた。また社会学部への思いや在校生へのアドバイスなど、卒業生ならではの温かい、また厳しい言葉も多数いただくことができた。回答いただいた一票一票の調査票は、今後の社会学部にとって大きな財産になると考えている。社会学部に籍を置く者としては、今回得られた調査データ、結果これからの社会学部の教育、研究に有効に利用していく責務があると強く感じている。

本調査は、50周年記念事業委員会が主体となり、具体的には安藤文四郎、中野康人、岡本卓也、渡邊勉が中心となり、調査票の作成には武田丈、前田豊、福田雄にも協力いただいた。現在までのところ、学会報告、研究論文については、中野康人、岡本卓也、渡邊勉が中心におこなっている。なお、本報告書の執筆は渡邊がおこなった。

この調査は、24,000人余りの社会学部の卒業生の方々の協力なくしてはありえませんでした。あらためて深く感謝申し上げます。また関西学院同窓会には、調査への協力や名簿の提供をいただきました。関西学院大学総合教育研究室の方々にも調査に対して助言をいただきました。あらためて深く感謝申し上げます。

関西学院大学社会学部
渡邊 勉

目 次

1. 調査の概要	
1.1 調査の目的	6
1.2 調査主体	6
1.3 調査の方法	7
1.4 項目対応表	8
1.5 既発表	9

調査結果の分析

1. 属性	
1.1 性別と卒業年	12
1.2 年齢	13
1.3 居住地	14
1.4 出身高校	15
2. 大学入学	
2.1 第一志望校	17
2.2 他大学の受験	18
2.3 社会学部入学の理由	20
3. 大学生活	
3.1 ゼミ	25
3.2 ゼミ選択理由	26
3.3 講義出席率	27
3.4 大学時代の成績	28
3.5 講義出席率と学業成績の関連	29
3.6 大学生活の満足度	29
3.7 サークル・部活	31
3.8 学生時代に読んでいた本	31
3.9 講義のない日の過ごし方	33
4. 就職活動	
4.1 就職を考え始めた時期	34

4.2 就職活動で考慮したこと	36
4.3 初職の入職経路	38
5. 職業経歴	
5.1 初職	40
5.2 転職	44
5.3 初職離職の理由	47
5.4 現職	48
5.5 初職と現職	53
6. 家計支持者	
6.1 家計支持者の属性	55
6.2 家計支持者の職業	55
6.3 家計支持者の学歴	56
7. 家族	
7.1 結婚	58
7.2 配偶者	60
7.3 子供	61
7.4 同居人	63
7.5 女性のライフコース	65
8. 人生の転機	
8.1 転機の時期	69
8.2 転機の内容	69
9. 職業意識	
9.1 仕事満足感	71
9.2 仕事で重視する側面と充足されている側面	71
9.3 能力、技能の獲得時期	75
9.4 重要な能力	83
10. 生活	
10.1 生活満足感	85
10.2 組織活動	85
10.3 友人関係	86

10.4 交際範囲	88
11. 大学について	
11.1 大学への思い	91
調査資料	
1. 依頼はがき	98
2. 依頼状（調査票と同封）	99
3. 調査票	101
4. 御礼状	119

1. 調査の概要

1.1 調査の目的

1960年に創設された関西学院大学社会学部は、2010年に50周年を迎えた。50周年を迎えるにあたり、社会学部ではさまざまな記念事業をおこなう計画が立てられ、卒業生調査も記念事業の一環として計画された。

社会学部の50年の歴史のなかで、数多くの卒業生が社会で活躍し、社会学部とともに人生を歩んできた。本調査では、第一に卒業生の人生をたどっていくことにより、社会学部での教育、学生生活とは何であったのか、その後の人生にどのような意味や影響を与えているのかについて検討することを目的とする。そこからさらに社会学部の50年を振り返り、社会学部の教育、研究について検討する。

一方、大学全入時代を迎え、大学に対して社会が求めているものは近年大きく変化してきており、大学もそれに対応して変化させていかなければならないといわれている。ただやみくもに社会に迎合するだけでいいというわけではなく、社会学部の特性を活かしつつ、変えるべき点は変えていく必要がある。その際、社会が何を望んでいるのかの手がかりとして卒業生の意見はきわめて重要である。社会学部の教育、研究に対して、もっとも理解があり、また社会人の立場から批判的にも見ることのできる立場が、卒業生である。そこで第二の目的として、卒業生の意見を探ることで、社会学部のこれまでの50年を振り返り、これから先の社会学部の新しいあり方を探っていきたい。

こうした問題意識のもと、本調査は、

(1) 卒業生の人生（経歴）の把握

職業経歴、ライフイベント等

(2) 大学の役割

(2)-1. 大学教育と職業とのつながり（連結）

(2)-2. 大学教育、大学における研究のあり方についての卒業生の意見

を明らかにすることによって、社会学部の歴史をたどり、今後の社会学部の方向性を定めるための資料を提供することを目的とする。

1.2 調査主体

本調査は、関西学院大学社会学部50周年記念事業委員会が主体となっておこなわれた。特に安藤文四郎、渡邊勉、中野康人、岡本卓也（全て関西学院大学社会学部教員）が中心となって調査をおこなった。また事務局は、北井晃一（社会学部事務長）、太田亜矢子（社会学部事務員）が担当した。

1.3 調査の方法

(1) 調査に至る経緯

2009年1月28日の社会学部教授会において、卒業生調査の実施が承認された。それを受けて、2009年3月10日に調査実施のための研究会を立ち上げ、具体的な調査計画、調査票作成に入ることになった。また2009年4月6日に関西学院同窓会を訪問し、社会学部の卒業生調査への協力の依頼をおこない、同窓会協力のもとで調査をおこなう計画が立てられた。続いて、5月25日にはすでに何度も関西学院大学の卒業生調査をおこなっている総合教育研究室（現高等教育推進センター）を訪問し、助言をもらっている。その後週1回のペースで研究会に中で、調査実施に向けて準備をおこなっていった。

(2) サンプリング

2009年7月22日に、同窓会より同窓生名簿の提供を受ける。名簿の利用については、関西学院同窓会における「関西学院同窓会の個人情報に関する基本方針」及び「関西学院同窓会の個人情報の取り扱いについて」に則り、卒業生調査の実施に利用することとした。名簿の取扱については細心の注意を払うようにしてきた。

名簿の提供を受けて、まず、社会学部の同窓生名簿の中から、物故者、住所不明者を除いた23,556名をサンプリング台帳とした。この中から、まず海外在住者87名を抽出した。今回の調査では、海外在住者の卒業生の方々の意見を広く伺いたいとの意図もあったため、名簿上の海外在住者については全員対象者とした。次に、残りの同窓生の中から7,913名を単純無作為抽出によって抽出した。さらに、1962年から1966年の卒業生サンプルが少ないため、この5年間の卒業生については、100サンプルをさらに追加で割り当て、無作為抽出でサンプルを抽出した。これにより、あわせて8,000サンプルを選び出した。

(3) 実査

調査は、自記式の郵送法でおこなうこととした。

まず8月26日に対象者に対して、依頼葉書を送付した。発送作業はタイクーパーメールサービスに委託しておこなった。送付した対象者のうち、49名は既に亡くなっている、あるいは住所不明であった。その結果、7551名に対して、9月2日に調査票を発送した。返信の締め切りを9月24日とした。その後、お礼状を送付した。調査は年内続けられた。しかしその後も調査票は返送され、最終的には2月まで回収がおこなわれた。

最終回収数は、2169票、回収率は28.7%であった。

調査票の回収は、卒業生調査事務局がおこない、また問い合わせの電話対応等も事務局がおこなった。

(4) データ入力、クリーニング

調査票の回収とあわせて、順次データ入力をおこなった。データ入力は、株式会社ウェイヴインターナショナルに委託しておこなった。データは12月末までに納品された。

2010年1月からは、渡邊、中野、岡本の3名でデータクリーニングをはじめた。3月に暫定版のデータを完成し、2010年4月に集計速報版を渡邊、中野、岡本の3名で作成した。pdfファイルにした上で、その後社会学部のホームページにアップしている。

1.4 項目対応表

本調査報告書と調査票の質問項目の関係は以下の通りである。

章	節	関連する質問
1. 属性	1.1 性別と卒業年	Q1
	1.2 年齢	Q1
	1.3 居住地	別紙職歴表
	1.4 出身高校	Q2
2. 大学入学	2.1 第一志望校	Q4(1)
	2.2 他大学の受験	Q4(2)
	2.3 社会学部入学の理由	Q4(3)
	2.4 ゼミ	Q5(1)
	2.5 ゼミ選択理由	Q5(2)
	2.6 講義出席率	Q6(1)
	2.7 大学時代の成績	Q6(2)
	2.8 講義出席率と学業成績の関連	Q6(1)、Q6(2)
	2.9 大学生活の満足度	Q7
	2.10 サークル・部活	Q11(1)、Q11(2)
	2.11 学生時代に読んでいた本	Q9
	2.12 講義のない日の過ごし方	Q8
3. 就職活動	3.1 就職を考え始めた時期	Q12
	3.2 就職活動で考慮したこと	Q13
	3.3 初職の入職経路	Q14
4. 職業	4.1 初職	別紙職歴表
	4.2 転職	別紙職歴表
	4.3 初職離職の理由	Q15
	4.4 現職	別紙職歴表

	4.5 初職と現職	別紙職歴表
5. 家計支持者	5.1 家計支持者の属性	Q17(1)
	5.2 家計支持者の職業	Q17(2)
	5.3 家計支持者の学歴	Q17(3)
6. 家族	6.1 同居人	Q18
	6.2 結婚	別紙職歴表
	6.3 女性のライフコース	Q22
7. 人生の転機	7.1 転機の時期	Q16
	7.2 転機の内容	Q16
8. 職業意識	8.1 仕事満足感	Q20
	8.2 仕事で重視する側面と充足されている側面	Q21
	8.3 能力、技能の獲得時期	Q23(1)
	8.4 重要な能力	Q23(2)
9. 生活	9.1 生活満足感	Q24
	9.2 組織活動	Q25
	9.3 友人関係	Q26
	9.4 交際範囲	Q27
10. 大学について	10.1 大学への思い	Q28

なお今回の報告書では、問 10、問 29、問 30、問 31 については、分析を示していない。問 10 については『関西学院大学社会学部紀要』111 号の岡本論文、問 29 については同 111 号の中野論文、問 30 については同 110 号の中野論文に分析があるので、そちらを参照されたい。

1.5 既発表

(1) 論文

渡邊勉. 2010. 「大卒者の入職過程と職業キャリア—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析

(1)—」『関西学院大学社会学部紀要』110: 1-22.

中野康人. 2010. 「社会学は「役立つ」学問か—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(2)

—」『関西学院大学社会学部紀要』110: 23-32.

岡本卓也. 2011. 「思い出の風景としてのキャンパス—関西学院大学社会学部卒業生調査の分

析(3)—」『関西学院大学社会学部紀要』111: 87-98.

渡邊勉. 2011. 「大卒者のライフコース—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(4)—」『関

西学院大学社会学部紀要』111: 99-122.

中野康人. 2011. 「関学生の Mastery for Service—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(5)

一」『関西学院大学社会学部紀要』111: 123-138.

中野康人. 2011. 「社会学部生・学部教育へのアドバイス—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(6)—」『関西学院大学社会学部紀要』112: 1-11.

(2) 学会報告等

渡邊勉. 2010. 「大卒者の就職とキャリア—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(1)—」第83回日本社会学会大会、名古屋大学.

中野康人. 2010. 「社会学は「役立つ」学問か—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(2)—」第83回日本社会学会大会、名古屋大学.

岡本卓也. 2010. 「卒業生が語る青春の(!?) 大学生活」関西学院大学社会学部卒業生調査報告会「卒業生の大学生活とキャリア」.

中野康人. 2010. 「社会学は「役立つ」学問か」関西学院大学社会学部卒業生調査報告会「卒業生の大学生活とキャリア」.

渡邊勉. 2010. 「卒業したあと、どんなキャリアが待っているのか？」関西学院大学社会学部卒業生調査報告会「卒業生の大学生活とキャリア」.

調査結果の分析

1. 属性

1.1. 性別と卒業年

性別と卒業年カテゴリーの関連を見ると、図 1.1 のようになる。

卒業年カテゴリーは 1960 年代卒から 2000 年代卒の 5 つのカテゴリーに分けている。

今回の卒業生調査の回答者は、全体の傾向として、男性は 1960 年代卒から 1980 年代卒業の回答者が多く、女性は 2000 年代卒の回答者が多くなっている。具体的に全体パーセントから比率を見ると、男性では、1970 年代卒が最も多く 13.8%、続いて 1980 年代卒 13.5%、1960 年代卒 12.2% と高い比率であるが、1990 年代卒は 8.8%、2000 年代卒は 5.3% と低い。

一方女性は、2000 年代卒が 12.4% と最も高く、続いて 1970 年代卒と 1990 年代卒が 10.7%、1980 年代卒が 9.7% となっている。1960 年代卒は 3.0% と低い。

こうした傾向は、社会学部の入学生（卒業生）の変化に対応している。図 1.2 は、1960 年以降の男女別の入学者数をあらわしている。1960 年の入学者は男性が 299 名であったのに対して、女性は 21 名に過ぎなかった。それに対して 2010 年には男性は 320 名と 1960 年水準とあまり変わりがないのに対して、女性は 448 名と 20 倍以上に増加しているのである。こうした女性の増加が回答者の分布に影響していると考えられる。

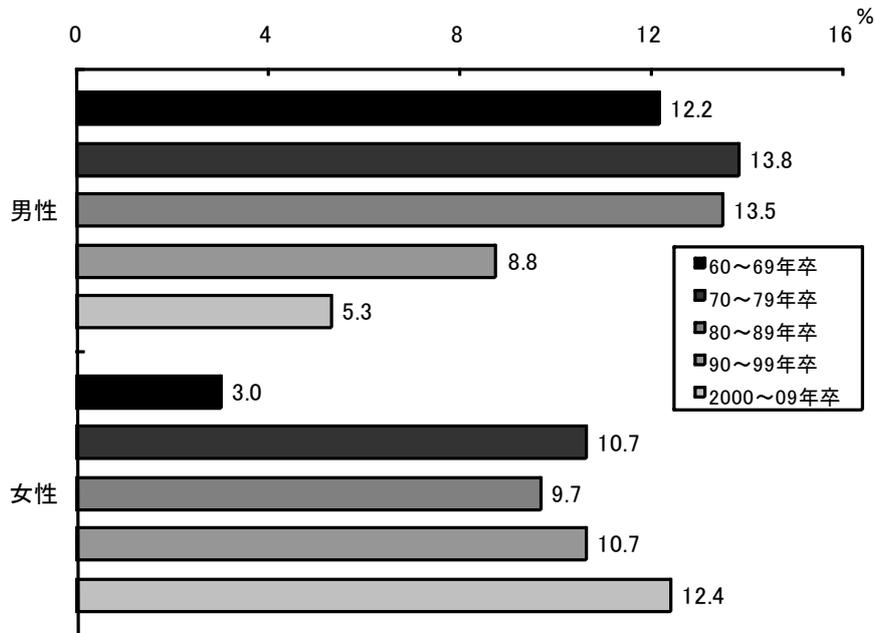


図 1.1 性別と年代

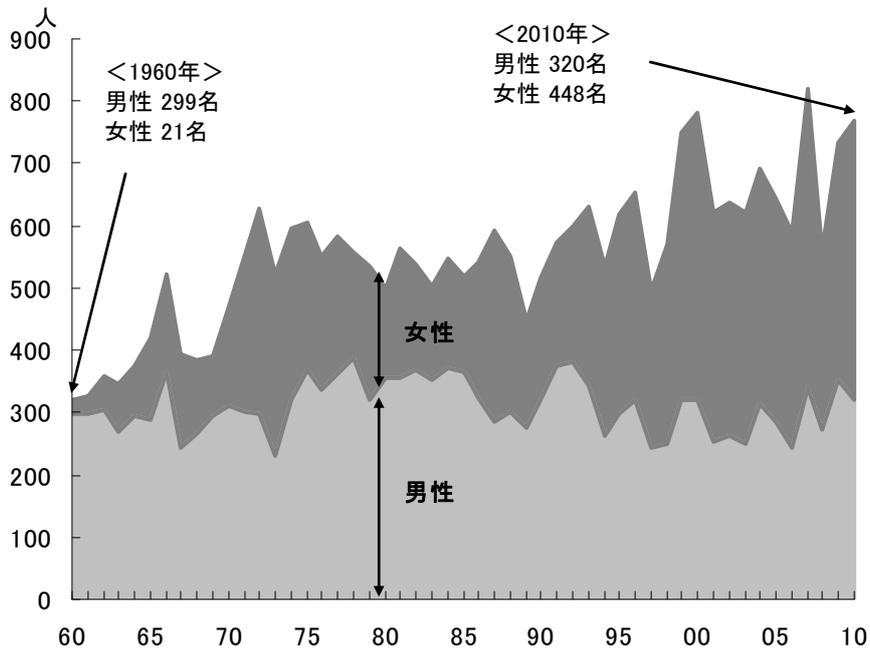


図 1.2 入学者数の変化

1.2 年齢

図 1.3 年齢

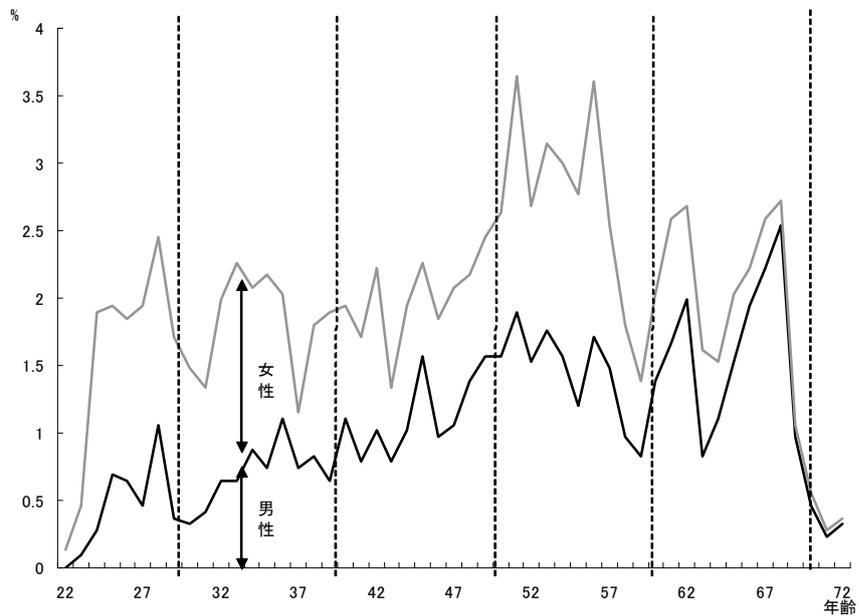


図 1.3 は、今回の調査回答者の年齢分布である。20 歳代、30 歳代は女性が多く、40 歳代、50 歳代はやや男性が多く、60 歳代以上は男性が多い。

1.3 居住地

表 1.1 居住地

	北 北海道・東	関東	中部	大阪	兵庫	関西（大阪、 兵庫以外）	中国、 四国	九州、 沖縄	海外
全体	0.7	17.2	5.5	24.1	31.0	10.5	7.1	1.7	2.2
男性	1.0	17.4	7.1	23.4	29.0	10.5	7.3	2.6	1.7
女性	0.4	16.9	3.7	24.9	33.2	10.5	6.8	0.7	2.8
60～69年卒	0.3	9.5	4.1	32.9	29.8	13.6	6.4	2.4	1.0
70～79年卒	1.2	14.9	5.8	21.7	34.4	10.3	8.9	1.4	1.4
80～89年卒	0.6	21.0	5.4	20.3	30.3	11.4	7.3	1.5	2.3
90～99年卒	1.0	21.4	7.2	24.7	23.9	9.0	6.5	1.7	4.5
2000～09年卒	0.3	16.7	4.7	24.7	35.9	8.8	5.5	1.9	1.6

現在の居住地について、全体の傾向としては、兵庫が31.0%で最も多く、大阪24.1%、関東17.2%、関西（大阪、兵庫以外）10.5%と続いている。関西に居住する者が65.6%となっている。逆に北海道・東北は0.7%、九州・沖縄1.7%、海外2.2%と低い。

性別の違いに着目すると、ほとんど違いはない。若干兵庫県に住む女性が多いが、違いは大きくない。

年代別では、関東については60年代卒、70年代卒は低い比率だが、80年代卒、90年代卒は20%を超えている。中部は、60年代卒から90年代卒までは上昇しているが、2000年代卒ではやや下がっている。大阪は、60年代卒が32.9%と高いが、70年代卒以降は20～25%程度で安定している。兵庫については90年代卒が23.9%と最も低く、2000年代卒が35.9%、70年代卒が34.4%と高い。関西（大阪、兵庫以外）は60年代卒が13.6%で、若い世代ほど比率が低く、2000年代卒は8.8%である。中国・四国は70年代卒が8.9%と最も高く、2000年代卒が5.5%と最も低い。九州・沖縄はどの年代も1～2%程度である。海外については、90年代卒が4.5%であるが、後は低い。

1.4. 出身高校

出身高校から出身都道府県を見てみることにしよう。

都道府県を、北海道・東北・関東、中部、大阪、兵庫、関西（大阪、兵庫を除く）、中国・四国・九州、海外の7つのカテゴリーに分類した。

全体で見ると、兵庫県が36.9%と最も多い。続いて、大阪府の33.0%、中国・四国・九州の12.7%、関西（大阪、兵庫を除く）の10.9%となっている。後の地域については、低い比率である（中部4.5%、北海道・東北・関東1.2%、海外0.6%）。

表 1.2 出身地

	東北、関東	中部	大阪	兵庫	関西 大阪、兵庫以外	中国、四国、 九州	海外
全 体	1.2	4.5	33.0	36.9	10.9	12.7	0.6
男性	1.3	5.3	33.6	34.5	10.7	14.2	0.3
女性	1.2	3.6	32.4	39.7	11.2	11.0	1.0
60～69年卒	1.2	2.4	37.8	40.5	7.6	10.4	0.0
70～79年卒	0.8	3.2	31.3	41.0	9.1	14.6	0.0
80～89年卒	1.4	2.4	31.6	37.2	12.9	14.3	0.2
90～99年卒	1.2	6.9	35.0	29.3	13.1	12.6	1.9
2000～09年卒	1.8	8.1	31.1	36.3	11.2	10.2	1.3

性別で見ると、性別に関係なく、兵庫県が最も多く（男性34.5%、女性39.7%）、続いて大阪府（男性33.6%、女性32.4%）である。兵庫県と大阪府を合わせると全体の7割ほどが、この2府県の出身高校である。残りの約3割は、その他の地域の高校から入学している。女性は、男性よりも兵庫県内の高校からの入学が5ポイントほど高く、地元志向の者が男性よりも多いことが見て取れる。

また関西（大阪、兵庫を除く）は男性10.7%、女性11.2%であり、兵庫県、大阪府以外の関西圏からの入学は、男女ともに少ないことがわかる。また中国・四国・九州は、男性14.2%、女性11.0%と男性のほうがやや多い。中部についても男性5.3%、女性3.6%と男性のほうがやや多いことから、男性の方が女性よりも、広い範囲の地域から入学する傾向があることがわかる。しかし、関東以東からの入学者は、性別に関係なく非常に少ない（男性1.3%、女性1.2%）。

さらに年代別に見ると、兵庫県、大阪府がどの年代においても高い比率となっている。しかし、両府県を合わせた比率は、1960年代卒が78.3%であったのに対して、2000年代卒には67.4%と10ポイント以上低下している。一方近年増加している地域は、まず関西（大阪、兵庫を除く）について1960年代卒が7.6%であったのに対して、2000年代卒には11.2%

に微増している。具体的には、和歌山、奈良の比率がやや高くなってきている。また中部地方も、2.4%から 8.1%へと増加している。一方中国・四国・九州地方は、70 年代卒、80 年代卒に増加しているが、90 年代卒以降は減少傾向にある。北海道・東北・関東および海外は 60 年以降一貫して低い比率である。

2. 大学入学

2.1 第一志望校

大学受験時の第一志望校を尋ねている。回答選択肢は、関西学院大学社会学部、関西学院大学社会学部以外の学部、関西学院大学以外の私立大学、国公立大学の4つの選択肢であった。

表 2.1 第一志望校

	関学社会学部	関学社会学部 以外	関学以外の 私立大学	国公立大学
全 体	32.8	23.0	16.9	27.4
男性	30.1	24.8	19.5	25.5
女性	35.8	20.9	13.7	29.6
60～69 年卒	35.1	29.5	15.5	19.9
70～79 年卒	23.7	24.2	14.6	37.5
80～89 年卒	23.6	27.7	23.2	25.5
90～99 年卒	40.2	21.4	18.6	19.8
2000～09 年卒	47.4	11.0	11.0	30.6

全体の傾向を見ると、関西学院大学の社会学部の志望者を第一志望とする者が32.8%で最も多い。続いて、国公立大学が27.4%、関西学院大学の社会学部以外の学部が23.0%、関西学院大学社会学部以外の大学が16.9%となっている。

性別で比較してみると、男性は女性に比べて関西学院大学の社会学部以外の学部、関西学院大学以外の大学を志望する者が多い。逆に女性は、関西学院大学社会学部、国公立大学を志望する者が多い。

年代別で見ると、社会学部の志望者は、2000年代卒、1990年代卒が4割を越えている一方で、70年代卒、80年代卒は2割強と少なくなっている。近年社会学部を第一志望とする者が増えていることがわかる。近年、社会学という学問が認知されてきたことのあらわれとも考えられる。

関西学院大学の社会学部以外の学部を志望する者は、60年代卒から80年代卒までは25～30%であるが、90年代卒以降は減少しており、2000年代卒は11.0%に減少している。関西学院大学以外の私立大学については、80年代卒に23.2%と多いが、他の年代は2割を切っている。特に2000年代卒は11.0%と低くなっている。国公立大学については、1970年代卒と2000年代卒の比率が高く（1970年代卒が37.5%、2000年代卒が30.6%）、ちょうどオ

イルショックと平成不況に対応しており、経済の不況と関係している可能性が示唆される。

2.2 他大学の受験

関西学院大学の社会学部以外の大学、学部の受験について、11 のカテゴリーの中からあてはまる選択肢を全て選んでもらった。選択肢は以下の通りである。

(a) 関西学院大学の他学部
(b) 同志社大学
(c) 立命館大学
(d) 関西大学
(e) その他の関西の私立大学
(f) 関西の国公立大学
(g) 関東の私立大学
(h) 関東の国公立大学
(i) 関東、関西以外の私立大学
(j) 関東、関西以外の国公立大学
(k) その他

表 2.2 他大学の受験

	関西学院大学の 他学部	同志社大学	立命館大学	関西大学	その他の関西の 私立大学	関西の国公立大学	関東の私立大学	関東の国公立大学	関東、関西以外の 私立大学	関東、関西以外の 国公立大学	その他
全 体	58.7	37.8	28.8	43.6	36.0	29.3	16.3	3.0	2.5	5.0	4.8
男性	55.3	45.1	36.5	47.1	22.7	26.3	23.9	3.5	2.6	6.4	5.5
女性	62.5	29.7	20.2	39.7	50.9	32.7	7.9	2.4	2.3	3.5	4.0
60～69 年卒	49.3	45.8	17.6	20.8	4.6	26.1	14.8	1.8	0.0	1.8	6.3
70～79 年卒	60.4	37.0	28.8	38.8	22.6	41.3	12.1	1.6	1.9	5.5	3.3
80～89 年卒	64.9	46.7	33.3	53.1	48.6	26.9	22.5	2.7	2.7	4.5	1.7
90～99 年卒	59.8	38.4	31.1	49.3	45.2	16.2	20.1	5.0	4.2	5.5	9.9
2000～09 年卒	54.1	20.0	29.3	49.9	53.2	32.1	11.3	4.2	3.1	7.0	4.5

まず全体の比率を見てみよう。最も多いのは、関西学院大学の他学部であり、58.7%と、

約6割が受験している。続いて、関西大学 43.6%、同志社大学 37.8%、その他の関西の私立大学 36.0%、関西の国公立大学 29.3%、立命館大学 28.8%、関東の私立大学 16.3%である。後のカテゴリーは10%以下である。関東・関西以外の国公立大学が5.0%、関東の国公立大学が3.0%、関東・関西以外の私立大学が2.5%、その他が4.8%である。

性別で見ると、男性の比率が高いのは、立命館大学 (+16.3 ポイント)、関東の私立大学 (+16.0 ポイント)、同志社大学 (+15.5 ポイント)、関西大学 (+7.3 ポイント) である。逆に女性の比率が高いのは、その他の関西の私立大学 (+28.2 ポイント)、関西学院大学の他学部 (+7.1 ポイント)、関西の国公立大学 (+6.4 ポイント) である。ここから、男性は関関同立を受験する傾向が女性に比べて高く、女性は、関関同立以外の関西の私立大学を受験する傾向が高いことが読み取れる。

表 2.3 他大学受験のパターン

他学部	関関同立	他私立	国立	全体	男性	女性	60~69 年卒	70~79 年卒	80~89 年卒	90~99 年卒	2000~ 09年卒
×	×	×	×	10.8	12.6	8.8	18.8	6.2	4.8	16.9	11.5
×	×	×	○	3.6	3.7	3.4	6.1	7.2	0.4	1.4	2.9
×	×	○	×	3.9	4.0	3.8	4.3	3.6	3.4	3.6	4.9
×	×	○	○	2.1	1.9	2.4	0.9	2.6	2.0	1.4	3.4
×	○	×	×	7.7	9.8	5.2	17.6	7.2	5.4	5.2	5.5
×	○	×	○	5.3	5.9	4.7	5.8	7.9	4.4	2.4	5.7
×	○	○	×	8.2	8.1	8.4	3.3	5.5	12.5	10.5	8.1
×	○	○	○	3.8	3.3	4.4	0.6	1.5	4.8	4.0	8.1
○	×	×	×	4.0	4.5	3.5	10.9	4.0	3.0	1.7	2.1
○	×	×	○	4.2	3.1	5.6	6.1	7.2	3.4	1.4	2.9
○	×	○	×	6.3	3.5	9.5	3.3	5.8	7.6	7.4	6.5
○	×	○	○	1.8	1.0	2.8	0.6	1.9	2.0	1.9	2.6
○	○	×	×	10.2	12.4	7.7	14.6	13.4	7.2	10.5	5.7
○	○	×	○	7.9	8.5	7.2	4.3	13.7	8.3	4.3	6.3
○	○	○	×	15.8	14.1	17.7	2.1	9.8	24.7	22.4	16.9
○	○	○	○	4.4	3.7	5.3	0.6	2.6	6.4	5.0	7.0

さらに、どのようなパターンで受験しているのかをまとめてみた。関学の他学部、関関同立、関関同立以外、国立大学の4カテゴリーとして、4つのうちどのカテゴリーを受験したかで、16のパターンに分けた。

全体では、他学部+関関同立+それ以外の私立大学を受験する者が15.8%で最も多く、併願

なしが 10.8%、他学部+関関同立が 10.2%となっている。また性別差の大きいパターンとして、関関同立のみ、他学部+関関同立、併願なしは男性の比率が高く、他学部+他私立、他学部+関関同立+他私立は女性の比率が高い。また年代別では、他学部のみ、関関同立のみ、他学部+関関同立は減少傾向にある。併願なしは、80年代卒に最小となるが、その後増加している。また他学部+関関同立+他私立、関関同立+他私立は80年代卒に最大値となり、その後微減しているが、2000年代卒もそれぞれ16.9%、8.1%と高い比率である。また関関同立+他私立+国立は減少している。

2.3 社会学部入学の理由

社会学部入学の理由について、11のカテゴリー（11番目は「その他」）の中から選んでもらった。しかしその他を選択した回答が多数あったため、さらに5つのカテゴリーをつくり、全体で16のカテゴリーに分類した。回答は、当てはまる選択肢すべてを選ぶ複数回答であったが、その中で最も当てはまる選択肢をさらに選んでもらっている。

1 創立の理念に共鳴したから	9 環境が良いから
2 伝統があるから	10 社会的な評価が高いから
3 関心のある分野だったから	11 親族や友人の薦め
4 自分の学力に合致したから	12 積極的理由なし
5 受験科目が得意だったから	13 あこがれ、イメージがいいから
6 偏差値が高かったから	14 就職のため
7 教員が魅力的だったから	15 やりたいことがあるから
8 通学に便利だから	16 その他

(1) あてはまる理由（複数回答）

まず、すべての当てはまる理由について、その傾向を見ていくことにする。

全体の傾向で見ると、最も比率が高いのは「関心のある分野だったから」の60.3%、続いて「環境がよいから」49.4%、「自分の学力に合致したから」41.6%、「社会的な評価が高いから」32.3%となっている。

性別で見ると、全体にどの理由についても女性のほうが、比率が高くなっている。唯一「受験科目が得意だったから」が男性のほうが3.7ポイント高くなっている。女性の比率が男性よりも高い理由を挙げると、「環境がよいから」が14.6ポイント、「通学に便利だから」が9.6ポイント、「関心のある分野だから」が8.9ポイント、「伝統があるから」が7.7ポイント、「社会的な評価が高いから」が7.1ポイント、比率が高くなっている。

年代別で見ても、まず若い年代ほど比率が高い理由としては、「関心のある分野だから」、「社会的な評価が高いから」、「偏差値が高かったから」である。逆に若い年代ほど比

率が低い理由は、「自分の学力に合致したから」、「環境がよいから」、「受験科目が得意だったから」、「創立の理念に共鳴したから」である。比率が高くなって理由の共通点は社会的評価や学問内容であるのに対して、低くなっている理由の理由の共通点は、自分の学力、環境である。つまり、50年の間に関学社会学部の社会的評価が高くなり、社会学という学問の認知度が高まったことを示している。また受験対策や関西学院大学全体に関する理由、つまり社会学とは直接関係のない理由は少なくなっている。つまりこのことは、社会学部を積極的に選択している者が、50年間の間に増加してきたことを示していると考えられる。

表 2. 4a 社会学部入学の理由

	創立の 理念に 共鳴	伝統が あるから	関心の ある分野 だから	自分の 学力に 合致した から	受験科 目が得 意だった から	偏差値 が高かつ たから	教員が 魅力的 だった から	通学に 便利 だから
全 体	7.5	26.2	60.3	41.6	17.9	6.1	2.7	18.9
男性	7.1	22.7	56.2	40.6	19.6	6.3	2.7	14.4
女性	8.0	30.4	65.0	42.8	15.9	5.9	2.6	24.0
60～69年卒	12.7	22.9	54.2	42.1	29.4	0.9	2.8	17.0
70～79年卒	5.5	25.3	55.1	49.4	21.3	2.9	3.0	21.3
80～89年卒	8.2	28.5	54.9	46.5	16.8	8.0	1.4	18.4
90～99年卒	7.2	28.6	63.2	34.6	11.3	8.2	2.9	15.1
2000～09年卒	5.5	24.7	76.4	31.8	12.1	10.2	3.4	21.8

表 2. 4b 社会学部入学の理由（続き）

	環境が よいから	社会的な 評価が 高いから	親族や 友人の 薦め	積極的 理由なし	あこが れ、イメ ージ	就職の ため	やりたい ことが ある	その他
全 体	49.4	32.3	3.0	2.6	1.6	0.2	0.4	1.9
男性	42.6	29.0	2.3	3.1	1.1	0.3	0.3	2.2
女性	57.2	36.1	3.8	2.0	2.2	0.1	0.4	1.6
60～69年卒	45.8	26.0	2.8	2.2	1.2	0.3	0.6	5.6
70～79年卒	53.6	29.3	3.6	2.5	0.8	0.6	0.2	1.1
80～89年卒	52.1	33.5	1.8	3.6	2.0	0.2	0.6	1.0
90～99年卒	46.9	34.6	4.1	2.2	2.6	0.0	0.2	1.7
2000～09年卒	45.7	37.5	2.6	2.4	1.6	0.0	0.3	1.3

(2) 最もあてはまる理由

次に、理由の中で最も当てはまるものについて見ていくことにしよう。(1) では、あてはまる理由を全て挙げてもらっていたが、その中でどの理由が最も重要な理由であったかを尋ねている。

表 2.5a 社会学部入学の理由 (best)

	創立の 理念に 共鳴	伝統が あるから	関心の ある分野 だから	自分の 学力に 合致した から	受験科 目が得 意だった から	偏差値 が高かつ たから	教員が 魅力的 だった から	通学に 便利 だから
全 体	2.1	3.8	42.4	15.6	3.6	0.7	0.9	3.0
男性	2.1	3.9	40.9	17.4	4.9	1.1	0.9	2.3
女性	2.0	3.8	44.1	13.5	2.0	0.3	0.9	3.8
60～69 年卒	5.0	4.4	38.4	16.9	8.4	0.0	0.6	2.8
70～79 年卒	1.1	3.2	38.3	20.0	4.8	0.2	1.1	3.2
80～89 年卒	2.6	4.1	38.0	17.9	2.6	1.6	0.4	2.0
90～99 年卒	1.9	4.6	44.3	12.7	2.4	0.7	1.0	2.7
2000～09 年卒	0.3	2.9	54.9	8.5	0.3	0.8	1.3	4.2

全体では、「関心のある分野だったから」が 42.4%で最も多く、(1)の分析の結果とも一致している。続いて「自分の学力に合致したから」が 15.6%、「環境がよいから」が 11.5%、「社会的な評価が高いから」が 9.2%となっている。この 4 つの理由で、約 8 割に達している。この 4 つの理由は、入学前（学力水準）の観点と、入学後（関心、環境、評価）の観点に分けられる。また後者は、社会学部に関わる理由（関心）と関学全体に関わる理由（環境、評価）に分けられる。つまり、関西学院大学社会学部入学の理由は、関西学院大学自体の理念・環境、社会学部の学問内容、入学のための学力水準や偏差値の 3 つの理由にまとめることができる。

性別による違いに注目すると、「関心のある分野だから」、「環境がよいから」という理由は女性の比率のほうがやや高く、「自分の学力に合致したから」、「受験科目が得意だったから」という理由は、やや男性の比率が高い。この結果からは、男性は、入学できるかどうかを最重要視している者が比較的多く、女性は入学後の大学生活を最重要視している者が多いことがわかる。

また年代別で比較してみると、「関心のある分野だから」は、1980 年代卒まではほぼ 40%程度で一定であったが、90 年代卒以降増加しており、2000 年代卒は 54.9%にまで増加している。「自分の学力に合致したから」は 1970 年代卒に 20.0%となっているが、その後減少し、2000 年代卒には 8.5%となっている。「環境がよいから」は 1960 年代卒がやや低く 7.8%であるか、その後は大きな変化はなく、10%を少し超えている。また「社会的な評価が高いから」

は1960年代卒には7.5%であったがそれ以降増加し、90年代卒に10.9%にまで増加するが、2000年代卒には8.8%へと減少している。その他の理由で注目できるのは、「受験科目が得意だったから」である。1960年代卒には8.4%であったが、減少し続け、2000年代卒には0.3%にまで減っている。

表 2.5b 社会学部入学の理由 (best) (続き)

	環境が よいから	社会的な 評価が 高いから	親族や 友人の 薦め	積極的 理由なし	あこが れ、イメ ージ	就職の ため	やりたい ことが ある	その他
全 体	11.5	9.2	1.7	2.4	1.2	0.2	0.3	1.5
男性	9.4	9.7	1.4	3.1	0.7	0.4	0.3	1.8
女性	13.9	8.5	2.1	1.7	1.7	0.1	0.4	1.1
60～69年卒	7.8	7.5	0.9	1.9	0.6	0.3	0.6	3.8
70～79年卒	12.8	7.8	2.7	2.3	0.6	0.6	0.2	1.1
80～89年卒	12.2	10.6	1.4	3.5	1.6	0.2	0.4	0.8
90～99年卒	10.9	10.9	1.9	2.2	2.2	0.0	0.2	1.2
2000～09年卒	12.5	8.8	1.3	2.1	0.8	0.0	0.3	1.1

表 2.6 第一志望と志望理由

	理念・環境	学問内容	学力水準	その他
関学社会学部	28.6	56.2	11.3	3.9
関学社会学部以外	38.4	24.0	30.8	6.8
関学以外の私立大学	29.7	41.1	22.4	6.8
国公立大学	27.3	45.3	19.6	7.8

さらに、志望理由と第一志望の間の関連についても見てみることにした。志望理由については、先の分析に従って、関学の理念・環境、学問内容、学力水準（自分の学力水準や偏差値）、その他の4カテゴリーに再コードした。

関学社会学部を志望している者については、学問内容を理由として入学する比率が56.2%と約6割は社会学部の学問内容（や教員の魅力）によって社会学部を選んでいる。一方、関学社会学部以外の学部を第一志望にした者については、24.0%に過ぎず、関学以外の私立大学は41.1%、国公立大学は45.3%となっている。

関学社会学部以外の学部を志望していた者については、関学の理念や環境を理由にしている比率が38.4%と最も高くなっている。また学力水準も30.8%と高い。関学以外の私立大学と国公立大学を第一志望にしている者については、学問内容の比率が40%代、理念・環

境の比率が3割弱、学力水準が2割程度と、分散している。

3. 大学生活

3.1 ゼミ

今回の調査の回答者の所属ゼミ数は、94であった。各ゼミの回答者数をまとめたのが、表である。今回の調査において、数多くのゼミ出身者から回答を得たことがわかる。

表 3.1 所属ゼミ

回答者数	ゼミ	度数
50名以上	津金沢聡広、萬成博、田中國夫、領家譲、藤原恵、定平元四良、杉原方、武田建、嶋田津矢子、山路勝彦、倉田和四生、芝田正夫、小関藤一郎	13
30名以上	牧正英、余田博通、西山美瑛子、丹羽春喜、杉山貞夫、遠藤惣一、張光夫、佐々木薫、高田眞治、大道安次郎、山本剛郎、中野秀一郎、芝野松次郎、川久保美智子	14
10名以上	加藤春恵子、鈴木信五郎、真鍋一史、鳥越皓之、本出祐之、浅野仁、高坂健次、對馬路人、立木茂雄、宮原浩二郎、奥野卓司、阿部潔、荒川義子、大谷信介、中山慶一郎、居樹伸雄、荻野昌弘、竹内愛二、藤原武弘、塩原勉、海野道郎、石川明、三浦耕吉郎、正村俊之、安藤文四郎、難波功士、杉本照子、池埜聡、川島恵美、山中良知	30
9名以下	室田保夫、大和三重、牧里毎治、田中耕一、森康俊、岡村重雄、青山秀夫、武田文、藤井美和、前橋信和、村山冴子、大村英昭、古川彰、山上浩嗣、中野康人、光吉利之、福地直子、打樋啓史、野瀬正治、清水盛光、安田三郎、W.B.デーヴィス、ルース M. グルーベル、八木克正、蔵内数太、比嘉正範、春名純人、宮田満雄、船本弘毅、山本武利、森久美子、松岡克尚、村川満、藤戸淑子、野波寛、H.P.リーダーバツハ、西村正男	37
合計		94

3.2 ゼミ選択理由

ゼミ選択の理由について、8つの選択肢の中から当てはまる理由を全て挙げてもらった。さらに「その他」をリコードし、「先輩のすすめ」の理由を新たに加え、9つの理由にまとめた。具体的には、以下の理由である。

1	学びたい学問のゼミだったから	6	友人の影響で
2	魅力ある先生だから	7	楽しそうだったから
3	就職に有利だと思ったから	8	先輩の薦め
4	楽しそうだから	9	その他
5	希望した分野に行けなかったから		

まず全体の傾向を見ると、最も多い理由は、「学びたい学問のゼミだから」であり、70.7%である。続いて、「魅力ある先生だから」が36.3%、「楽しそうだから」20.6%、「友人の影響で」17.8%となっている。ここからゼミ選択が、教員の専門と人柄によっておこなわれていることがわかる。

表 3.2 ゼミ選択理由

	学びたい学問のゼミだから	魅力のある先生だから	就職に有利だと思ったから	楽しそうだから	希望した分野に行けなかったから	友人の影響で	楽しそうだったから	先輩のすすめ	その他
全体	70.7	36.3	7.5	20.6	9.8	17.8	9.4	1.0	2.9
男性	66.3	33.7	10.9	17.2	10.2	17.7	11.1	1.0	3.0
女性	75.7	39.4	3.6	24.6	9.3	17.9	7.3	0.9	2.7
60～69年卒	65.6	40.8	16.6	16.9	3.1	25.5	9.2	0.9	4.3
70～79年卒	73.7	31.3	8.2	13.2	8.4	16.6	12.6	0.4	3.1
80～89年卒	69.3	33.3	7.0	21.6	11.2	16.2	10.0	1.6	2.8
90～99年卒	69.4	34.9	4.6	22.2	12.5	18.1	7.2	1.7	2.4
2000～09年卒	74.0	44.9	2.6	31.2	12.6	14.7	6.6	0.3	2.1

次に性別で見ると、男性に多い理由としては、「就職に有利だと思ったから」が女性よりも7.2ポイント高く10.9%である。一方女性に多い理由としては、「学びたい学問のゼミだから」が+9.4ポイント、「楽しそうだから」が+7.4ポイント、「魅力のある先生だから」が+5.6ポイントとなっている。基本的に男女ともにゼミは学問する場として捉えているが、特に男性は、ゼミを手段として捉え、女性はゼミを居心地のいい場として考える傾向があ

と思われる。

年代別で見ると、「学びたい学問のゼミだから」という理由は、大きな変化はないが、2000年代卒に入り、大きく増加している。近年増加傾向にある理由としては「魅力ある先生だから」、「楽しそうだから」、「希望した分野に行けなかったから」といった理由が挙げられる。逆に減少傾向にある理由としては、「楽しそうだから」、「就職に有利だと思ったから」が挙げられる。また「友人の影響で」も60年代卒が高く70年代卒以降低くなっているが、70年代卒以降はほぼ一定であり、60年代卒だけが突出して高い比率となっている。

以上から、近年になるに従って、「魅力ある先生」、「楽しそう」といったゼミの雰囲気重視する傾向が強くなっている。さらに「希望した分野にいけない」といった理由も増えていることから、学生のゼミ希望が特定のゼミに集中している傾向を読み取ることができると。逆に「楽しそう」といった学問とは関係ない理由でのゼミ選択は減少傾向にあり、まじめな学生が増えていることが伺える。

3.3 講義出席率

表 3.3 講義出席率

	よく出席していた	まあ出席していた	あまり出席して いなかった	ほとんど出席して いなかった
全 体	34.8	45.0	18.1	2.1
男性	25.9	45.3	25.1	3.7
女性	45.0	44.7	10.0	0.3
60～69 年卒	42.8	41.2	13.8	2.2
70～79 年卒	37.6	42.9	18.4	1.1
80～89 年卒	26.1	48.6	22.5	2.8
90～99 年卒	31.6	45.2	19.8	3.4
2000～09 年卒	38.8	46.2	13.6	1.3

全体では、「よく出席していた」が 34.8%、「まあ出席していた」が 45.0%、「あまり出席してなかった」が 18.1%、「ほとんど出席してなかった」が 2.1%であった。約 8 割は、比較的出席していたと自己評価しており、全体として出席率が高かったことが伺える。

性別で見ると、男性よりも女性のほうが出席状況はよい。「よく出席していた」と回答した者の割合は、男性よりも女性の方が 1.7 倍も多い。逆に「あまり出席してなかった」、「ほとんど出席してなかった」をあわせた比率は、男性が 28.8%、女性が 10.3%で、男性のほうが女性よりも約 2.8 倍も多い。女子学生は男子学生に比べるとまじめに授業に出席していたことがわかる。

年代で見ると、「よく出席していた」と回答した者の比率は、60年代卒から80年代卒に

かけて減少し、90年代卒以降再び増加する。逆に「あまり出席しなかった」と「ほとんど出席しなかった」を合わせた比率は、80年代卒に最も高くなっている。こうした年代による変化の傾向は性別に関わりない。つまり、近年になるに従い、男性の比率が低くなることによる影響ではない。

3.4 大学時代の成績

大学時代の成績について、自己評価してもらった。

全体では、「ほとんど優」が7.5%、「優が多い」が31.2%であり、合わせると38.7%と約4割の者が、学生時代成績が良かったと回答している。また「優が半分くらい」が29.8%であり、「優は少ない」が27.6%、「ほとんど優はない」が3.8%となっている。「優は少ない」と「ほとんど優はない」を合わせると31.5%であり、学生時代成績が悪かったと自己評価している者は約3割であった。全体の分布は良かったという回答にやや偏っているものの、おおよそ対称的な分布となっている。

性別で見ると、男性よりも女性のほうが成績がよいという評価が多い。女性は「ほとんど優」と「優が多い」を合わせると、54.0%と半数を超えている。

年代別で見ると、若い世代ほど、「優が多い」と回答する者が多い。逆に「優は少ない」は若い世代ほど少なくなっている。年代別の傾向を性別で見ると、年代別の違いはほとんどなくなる。例えば、男性の「ほとんど優」は60年代卒が5.4%であったのに対して、2000年代卒は2.6%になっている。女性も同様に見ると、60年代卒が9.8%であるのに対して、2000年代卒は10.7%であった。つまり年代の違いは、性別の構成比の違いである。

表 3.4 大学時代の成績

	ほとんど優	優が多い	優が半分	優は少ない	ほとんど優はない
全 体	7.5	31.2	29.8	27.6	3.8
男性	3.8	22.0	30.3	37.7	6.2
女性	12.0	42.0	29.3	15.7	1.0
60～69年卒	6.5	30.2	26.8	32.0	4.6
70～79年卒	7.1	26.0	35.8	28.3	2.9
80～89年卒	8.1	28.8	26.3	31.5	5.2
90～99年卒	7.8	34.7	26.4	27.1	3.9
2000～09年卒	8.0	38.6	32.4	18.2	2.7

3.5 講義出席率と学業成績の関連

講義への出席の程度と学業成績の関係をクロス表で見ると、表のようになる。

「よく出席していた」と回答している者のうち、「ほとんど優」は17.5%であり、「まあ出席していた」の3.0%に比べても、極めて高い比率であることがわかる。「よく出席していた」者の67.8%は、成績がかなり良かった（「ほとんど優」+「優が多い」）ことがわかる。これは、「まあ出席していた」が30.9%、「あまり出席していなかった」が6.0%、「ほとんど出席していなかった」が4.4%であるのに対して極めて高いことがわかる。

逆に、「ほとんど出席していなかった」者のうち、「ほとんど優がない」と回答した比率は53.3%と高い。また「あまり出席していなかった」者について見ると、「ほとんど優はない」は10.7%と、それほど高くないが、「優は少ない」と回答した者が62.5%と高い比率である。

さらに、両変数の相関係数を見たところ、0.577と高い相関があることがわかる。

表 3.5 講義出席率と学業成績

	ほとんど優	優が多い	優が半分	優は少ない	ほとんど優はない	合計
よく出席していた	17.5	50.3	24.7	7.4	0.1	100.0
まあ出席していた	3.0	27.9	38.3	29.3	1.6	100.0
あまり出席していなかった	0.5	5.5	20.8	62.5	10.7	100.0
ほとんど出席していなかった	0.0	4.4	13.3	28.9	53.3	100.0
全 体	7.6	31.2	29.8	27.6	3.8	100.0

3.6 大学生活の満足度

大学生活の満足度について、講義、ゼミ、実習、指導教員、大学施設、友人関係、サークル、アルバイトの8つの項目について、それぞれ尋ねている。

まず全体で見よう。大学施設の満足度が最も高く、50.5%が「とても満足」と回答している。続いて「友人関係」45.2%、「サークル活動」34.9%、「指導教員」26.1%、「ゼミ」22.7%、「実習」15.2%、「アルバイト」15.1%となっている。大学教育への評価（「指導教員」「ゼミ」「実習」）は、必ずしも高くない。

次に性別と年代別に見ていくが、「とても満足」4点、「まあ満足」3点、「どちらでもない」2点、「やや不満」1点、「不満」0点として、平均値を比較することにした。

性別で見ると、全体的に女性の満足度が高いことがわかる。特に、差の大きい項目は、実習、講義、アルバイトである。

次に、年代別で見ると、「大学施設」と「友人関係」については年代に関わりなく高い平均値となっている。違いが大きいのは、「アルバイト」であり、若い世代ほど平均値が高く

なっている。また「実習」、「指導教員」については、90年代卒まではあまり違いはないが、2000年代卒に入って平均値が高くなっている。

以上をまとめると、「大学施設」や「友人関係」といった大学生活を構成する環境についての評価は年代、性別に関わりなく高い。その一方で、「実習」「ゼミ」などの大学教育については、相対的に評価が低い。特に男性の評価が低い。近年高くなる傾向が見られる。「アルバイト」については、おそらく若い世代ほどアルバイトが多様になり、また費やす時間が長くなっていることも、評価が高くなってきている要因と考えられるだろう。

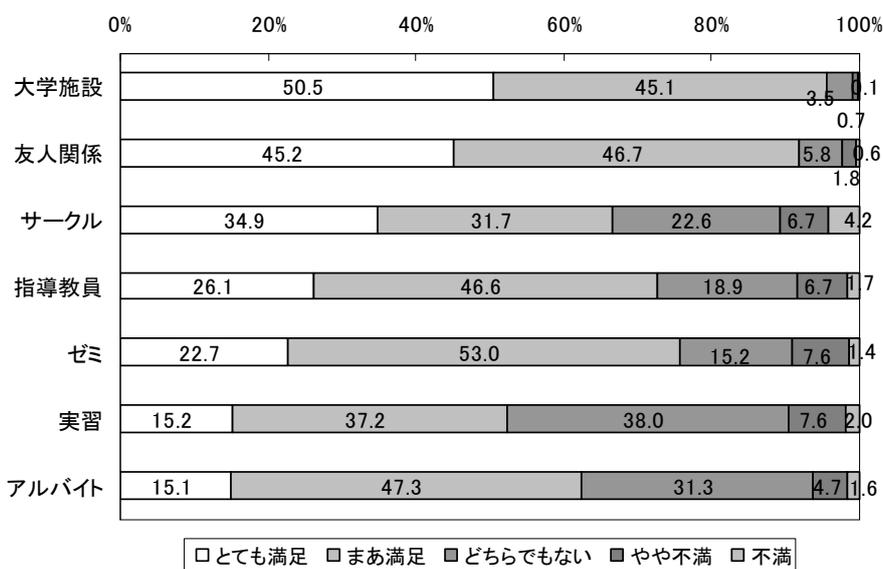


図 3.1 大学生生活の満足度 (全体)

表 3.6 大学生生活満足度

	講義	ゼミ	実習	指導教員	大学施設	友人関係	サークル	アルバイト
全体	2.66	2.88	2.56	2.89	3.45	3.34	2.87	2.69
男性	2.58	2.86	2.44	2.87	3.43	3.30	2.85	2.62
女性	2.76	2.90	2.70	2.90	3.47	3.39	2.88	2.78
60～69年卒	2.69	2.84	2.48	2.82	3.48	3.30	2.84	2.33
70～79年卒	2.61	2.86	2.47	2.85	3.42	3.34	2.83	2.61
80～89年卒	2.57	2.86	2.53	2.85	3.48	3.32	2.96	2.71
90～99年卒	2.70	2.84	2.55	2.86	3.47	3.38	2.88	2.78
2000～09年卒	2.79	3.02	2.80	3.08	3.42	3.37	2.79	2.97

3.7 サークル・部活

全体では、体育系が 40.9%、文化系が 40.5%とほぼ半々である。さらにボランティアが 11.2%である。また活動していない者の比率は、5.8%である。つまり、94.2%の卒業生は、なんらかの組織に加入して課外活動をしていたことになり、大学生活においてサークル・部活が重要な役割を担っていたことが伺える。

性別による違いを見ると、女性は男性よりも体育系で 1.4 ポイント、文化系で 3.4 ポイント比率が高い。ボランティアについては、男性の比率が 3.6 ポイント高くなっている。

年代別で見ると、体育系の比率は、60年代卒には 20.8%であったが、90年代卒には 56.1%、2000年代卒には 46.8%に増えている。文化系については逆に 60年代卒には 51.6%であったのに対して、90年代卒には 27.3%、2000年代卒には 30.7%に減少している。またボランティアについては 60年代卒には 15.8%と多かったが、70年代卒、80年代卒には 10%を下回っている。しかし 90年代卒には 12.0%、2000年代卒には 10.8%となっている。活動していない者の比率は、60年代卒から 80年代卒にかけて、減少しているが、90年代卒以降増加し、2000年代卒は 9.9%に増加している。

表 3.7 サークル・部活

	体育系	文化系	その他	体育系 +文化系	体育系 +その他	文化系 +その他	活動して いない
全 体	40.9	40.5	11.2	0.8	0.2	0.6	5.8
男性	40.2	38.8	12.9	0.9	0.2	0.8	6.1
女性	41.6	42.3	9.3	0.8	0.2	0.3	5.4
60～69年卒	20.8	51.6	15.8	1.1	0.7	2.5	7.5
70～79年卒	30.1	52.2	9.9	1.3	0.2	0.4	5.9
80～89年卒	47.4	39.6	9.5	0.6	0.0	0.0	2.8
90～99年卒	56.1	27.3	12.0	0.0	0.0	0.3	4.3
2000～09年卒	46.8	30.7	10.8	1.2	0.3	0.3	9.9

3.8 学生時代に読んでいた本

学生時代に読んでいた本について、作家別に分けて集計した。

無回答、特になし、思い出せない、多すぎて選べないなど、回答のなかった者は、全体の 42.3%に及んだ。男性は 40.5%、女性は 44.2%であった。

無回答を除いて上位 15 人の作家を集計すると、第 1 位は司馬遼太郎 5.6%、第 2 位は村上春樹 5.2%、以下夏目漱石、ルース・ベネディクト (『菊と刀』)、吉川英治 (『三国志』)、ド

ストエフスキー、太宰治、三浦綾子、土居建郎（『甘えの構造』）、五木寛之となっている。さらに 11 位以下では、マックス・ウェーバー、遠藤周作、宮本輝、柴田翔、聖書となっている。

性別による違いに注目すると、司馬遼太郎、吉川英治、マックス・ウェーバーは男性の比率が高い。また、村上春樹、夏目漱石、三浦綾子、土居建郎、遠藤周作、宮本輝、柴田翔は女性の比率が高い。さらに、ルース・ベネディクト、ドストエフスキー、太宰治、五木寛之、聖書は男女差が小さい。

表 3.8 学生時代に読んだ作家

著者	男性	女性	全体
1. 司馬遼太郎（竜馬がゆく、坂の上の雲、国盗り物語、項羽と劉邦など）	8.1	2.5	5.6
2. 村上春樹（ノルウェイの森、風の歌を聴け、世界の終わりとハードボイルドワンダーランドなど）	4.2	6.4	5.2
3. 夏目漱石（坊っちゃん、吾輩は猫である、こころ、三四郎など）	2.9	5.2	3.9
4. ルース・ベネディクト（菊と刀）	3.0	3.9	3.4
5. 吉川英治（三国志）	4.6	0.4	2.7
6. ドストエフスキー（罪と罰、カラマーゾフの兄弟など）	2.5	3.4	2.7
7. 太宰治（人間失格、斜陽、桜桃など）	2.0	3.0	2.5
7. 三浦綾子（塩狩峠、氷点）	1.2	4.1	2.5
7. 土居建郎（甘えの構造）	1.7	3.4	2.5
10. 五木寛之（青春の門、青年は荒野をめざす、など）	2.6	2.0	2.3
11. マックス・ウェーバー（プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神）	3.3	0.7	2.2
12. 遠藤周作（海と毒薬、沈黙）	1.3	3.0	2.1
13. 宮本輝（青が散る、春の夢、蛍川など）	0.9	2.9	1.8
13. 柴田翔（されどわれらが日々、贈る言葉）	1.0	2.7	1.8
15. 聖書	1.7	1.6	1.7

3.9 講義のない日の過ごし方

講義のない日の過ごし方について、自由回答で尋ねた。自由回答の内容を12のカテゴリーにまとめた。一人の回答者が複数の内容を含む回答をしている場合もある。

全体の傾向を見ると、アルバイトによって過ごしている者が63.8%と最も多い。続いて、部・サークル活動が57.9%、旅行が19.0%、友人と過ごす（会話、遊ぶなど）が16.7%となっている。

性別による違いに着目すると、男性に多い過ごし方としては、麻雀・パチンコ・競馬などである。男性は8.8%である一方で、女性は1人もいない。女性に多い過ごし方としては、買い物（+14.0ポイント）、旅行（+8.2ポイント）、アルバイト（+7.5ポイント）、習い事・勉強（+5.1ポイント）となっている。

年代による違いとしては、アルバイト、買い物、ボランティアの比率は、若い世代ほど高くなっている。逆に低くなる過ごし方として、麻雀・パチンコ、映画・音楽・読書、家事介護が挙げられる。また部・サークル活動は、80年代が最も高く、旅行は最も低くなっている。

表 3.9 講義のない日の過ごし方

	部・サークル活動	ボランティア	アルバイト	麻雀、パチンコ	家事介護	友人と過ごす	買い物	映画・音楽・読書	旅行	習い事、勉強	教会	家で過ごす
全 体	57.9	2.9	63.8	4.7	2.8	16.7	9.7	10.0	19.0	7.1	0.7	1.1
男性	56.3	2.8	60.3	8.8	2.5	12.5	3.2	9.6	15.2	4.7	0.6	1.4
女性	59.8	3.0	67.8	0.0	3.2	21.6	17.3	10.4	23.5	9.8	0.8	0.7
60～69年卒	53.8	1.6	42.8	13.8	7.2	16.6	3.1	15.3	22.2	8.8	2.2	0.6
70～79年卒	60.8	2.7	58.7	6.0	2.5	16.7	6.1	10.9	21.1	7.3	0.6	1.0
80～89年卒	62.6	3.0	66.2	4.0	1.6	15.3	9.3	9.3	11.1	5.6	0.8	0.8
90～99年卒	57.3	2.7	71.4	1.2	2.7	17.0	10.2	8.0	18.4	5.3	0.2	0.7
2000～09年卒	52.0	4.5	77.2	0.3	1.3	18.6	20.4	7.2	24.7	9.3	0.0	2.4

4. 就職活動

今回の調査では、就職活動について、複数の質問し、就職の時代的变化を明らかにすることを目的としている。

4.1 就職を考え始めた時期

まず就職を考え始めた時期について尋ねている。「関学入学前」、「1年生」、「2年生」、「3年生春から夏」、「3年生秋から冬」、「4年生春」、「4年生夏」、「4年生秋」、「4年生冬」、「大学院」、「卒業後」の11のカテゴリーから選んでもらった。

表 4.1 就職を考え始めた時期

	関学入学前	1年生	2年生	3年生	春から夏	3年生	秋から冬	4年生春	4年生夏	4年生秋	4年生冬	大学院	卒業後	考えたことがない
全体	4.3	1.1	2.6	9.3	31.0	29.2	9.9	4.1	2.2	0.5	1.6	4.1		
男性	4.2	1.4	3.0	9.0	30.0	30.8	9.8	4.2	2.1	0.5	1.2	3.9		
女性	4.4	0.8	2.1	9.7	32.3	27.4	10.1	4.1	2.4	0.4	2.0	4.4		
60～69年卒	4.6	0.9	1.5	4.3	22.0	30.9	11.0	7.0	6.1	0.6	1.8	9.2		
70～79年卒	4.0	0.8	1.5	5.5	18.6	37.6	13.9	6.8	2.9	0.2	2.1	6.1		
80～89年卒	4.2	2.6	2.6	5.4	21.3	37.3	16.9	4.2	0.6	0.4	1.4	3.0		
90～99年卒	4.6	0.7	3.6	12.5	43.2	26.1	4.3	0.7	1.0	0.7	1.0	1.7		
2000～09年卒	4.2	0.3	3.6	20.6	55.2	8.9	0.8	1.6	1.6	0.5	1.6	1.3		

全体では、3年生の秋から冬という回答が最も多く、31.0%であった。続いて、4年生春(29.2%)、4年生夏(9.9%)、3年生春から夏(9.3%)となっている。3年生の秋から4年生の春までの間に就職を考え始めた者が全体の約6割となっており、累積比率を求めると、4年生の春までに就職を考え始めた者は、全体の77.5%である。

性別では、ほとんど差がない。

年代別では、若い世代ほど就職を考え始める時期が早くなってきている。3年生春から夏の比率は60年代卒には4.3%に過ぎなかったのが、2000年代卒には20.6%にまで増加している。また3年生秋から冬の比率は、60年代卒が22.0%であったのが、2000年代卒には55.2%である。3年生までに就職を考え始めている累積比率は、60年代卒から、33.3%、30.4%、36.1%、64.5%、83.9%となっており、90年代卒以降に急速に早まっていることがわかる。

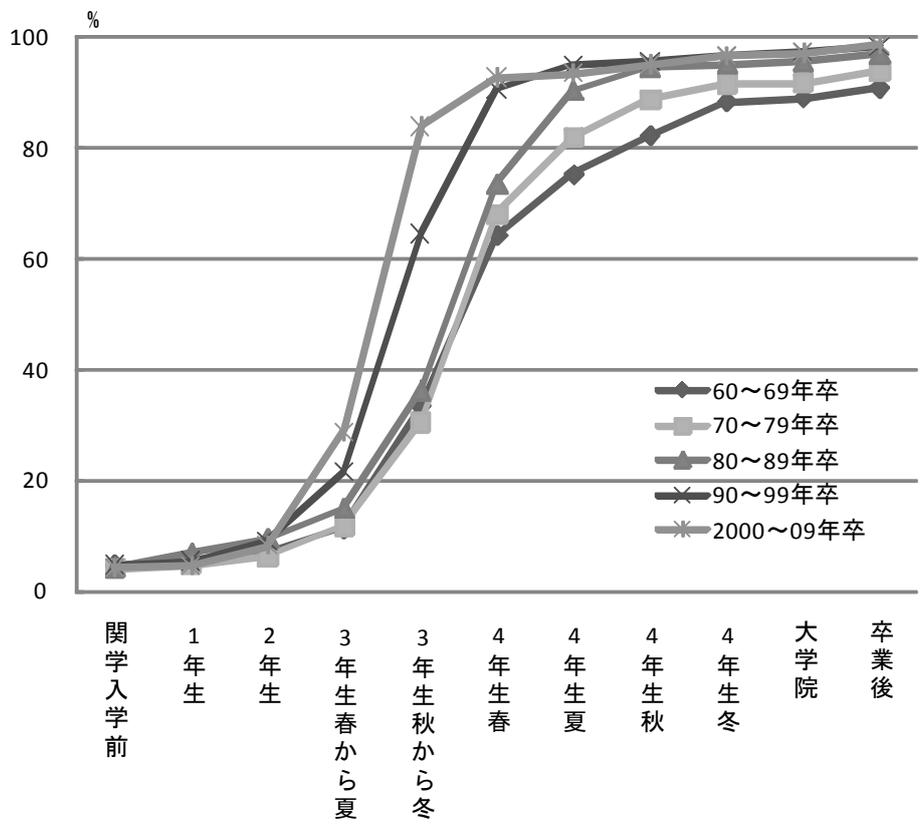


図 4.1 就職を考え始めた時期

4.2 就職活動で考慮したこと

就職活動をおこない、就職先を決めていく中で考慮したことについて尋ねている。選択肢は以下の通りであり、最初にあてはまるものをすべて選んでもらい、その中で最も当てはまるものについてさらに選んでもらっている。

1 職場の雰囲気が良いかどうか	6 実績のある会社かどうか
2 自分の能力を活かせるかどうか	7 雇用と身分の保障があるかどうか
3 収入は十分かどうか	8 勤務先はどこか
4 面白い仕事かどうか	9 その他
5 社会的な評価が高いか	

(1) 考慮した点（複数回答）

表 4.2 就職活動で考慮したこと（複数回答）

	雰囲気	能力発揮	収入	おもしろさ	社会的評価	実績	保障	勤務先	その他
全体	28.3	55.3	27.0	50.6	28.3	35.6	17.8	38.7	9.5
男性	18.4	55.6	27.6	50.8	29.3	35.7	15.3	28.5	9.3
女性	39.7	54.9	26.3	50.4	27.3	35.4	20.6	50.5	9.7
60～69年卒	13.3	64.3	21.9	43.3	25.7	30.5	15.7	27.6	12.4
70～79年卒	15.1	56.3	23.8	42.3	27.8	33.9	16.1	37.0	8.7
80～89年卒	24.7	57.5	27.8	50.6	29.0	41.8	16.2	37.3	9.0
90～99年卒	34.4	53.0	27.6	57.1	27.3	37.7	15.3	36.6	10.7
2000～09年卒	50.4	48.1	32.0	57.3	30.9	30.6	25.5	51.6	7.7

全体の比率を見てみると、能力発揮が 55.3%で最も比率が高く、おもしろさ 50.6%、勤務先 38.7%、実績 35.6%、雰囲気 28.3%、収入 27.0%、保障 17.8%、その他 9.5%と続いている。

性別で見ると、女性は男性よりも、「勤務先はどこか」(+10.2ポイント)、「職場の雰囲気が良いかどうか」(+9.9ポイント)の項目について、比率が高くなっている。逆に男性が女性よりも高い比率の項目はない。他の項目については、男女でほとんど差がない。

年代別に見ると、若い世代ほど比率が高くなっている項目として、おもしろさ、勤務先、雰囲気、収入、社会的評価が挙げられる。逆に若い世代ほど比率が低くなっている項目としては、能力発揮が挙げられる。また実績は 80年代卒に最も高い比率となっており、90年

代卒以降低くなっている。さらに 2000 年代卒に入って急激に比率が上昇している項目として、保障（10 ポイント）、勤務先（15 ポイント）が挙げられる。

以上から、世代による仕事に求めるものの違いが見えてくる。年長の世代は、自分の能力が発揮できることを重視する人が多かった。つまり仕事を通じた自己実現を目指した人が多かったと思われる。それに対して若い世代は、面白さや職場の雰囲気など、仕事をしていく上での環境を重視しており、仕事は能力を発揮する場としての位置づけでなくなっている。

(2) 最も考慮した点

さらに最も重視する項目について見ると、異なる傾向が見られる。

全体において最も重視する項目は、能力発揮（27.4%）であり、続いておもしろさ（24.2%）、勤務先（10.3%）となっている。性別で見ると、女性が男性よりも重視する比率が高い項目は、雰囲気（+7.5 ポイント）、勤務先（+2.6 ポイント）であった。逆に男性が重視する比率が高い項目は、社会的評価（+3.4 ポイント）、おもしろさ（+3.1 ポイント）であった。

年代で見ると、若い世代ほど比率が高い項目は、おもしろさ、雰囲気である。逆に若い世代ほど比率が低い項目は、能力発揮である。

表 4.3 就職活動で考慮したこと（best）

	雰囲気	能力発揮	収入	おもしろさ	社会的評価	実績	保障	勤務先	その他
全 体	7.8	27.4	2.4	24.2	8.5	7.5	3.9	10.3	8.0
男性	4.4	28.2	3.1	25.6	10.1	8.2	3.4	9.1	8.0
女性	11.8	26.6	1.5	22.5	6.6	6.8	4.4	11.7	8.1
60～69 年卒	1.7	40.4	3.5	14.8	10.0	7.4	4.3	8.7	9.1
70～79 年卒	3.7	28.7	2.2	20.0	10.6	8.9	4.5	12.6	8.7
80～89 年卒	6.1	29.2	2.1	24.5	7.9	9.1	3.7	9.6	7.7
90～99 年卒	11.0	20.9	2.9	30.5	8.3	6.1	3.2	8.0	9.1
2000～09 年卒	15.2	22.2	1.5	28.1	5.8	5.6	3.8	12.0	5.8

4.3 初職の入職経路

初職の入職経路について、13のカテゴリーと「その他」、「就職していない」を含めた15のカテゴリーで比率を求めた。

表 4.4a 初職の入職経路

	家族・親戚	友人・知人	学校の先輩	学校の先生	民間の職業紹介機関	直接応募	家業継承	起業
全 体	16.6	5.8	4.3	4.7	2.6	43.5	2.6	0.4
男性	16.3	5.1	6.1	4.8	1.8	42.0	3.7	0.4
女性	17.0	6.5	2.2	4.7	3.7	45.2	1.4	0.4
60～69年卒	33.6	7.8	5.3	11.5	0.3	13.7	5.3	0.6
70～79年卒	19.5	7.3	3.7	5.6	0.2	32.6	3.3	0.4
80～89年卒	17.0	6.3	6.7	3.6	1.2	46.4	2.6	0.4
90～99年卒	10.8	4.9	5.1	2.9	1.5	60.4	1.5	0.2
2000～09年卒	3.8	2.2	0.3	1.1	11.3	62.3	0.8	0.3

表 4.4b 初職の入職経路（続き）

	従業先に誘われた	公務員試験	学校紹介・掲示	実習を通じて	アルバイトから正社員	その他	就職していない
全 体	2.2	7.9	5.4	0.5	0.5	0.7	2.3
男性	3.0	8.8	6.5	0.2	0.3	0.5	0.6
女性	1.3	6.8	4.2	0.8	0.7	0.9	4.2
60～69年卒	2.2	5.3	9.3	0.9	0.3	1.2	2.5
70～79年卒	1.7	9.8	10.6	0.6	0.4	0.6	3.9
80～89年卒	2.8	7.7	3.0	0.2	0.4	0.0	1.6
90～99年卒	2.9	5.9	2.4	0.0	0.2	0.7	0.5
2000～09年卒	1.3	9.7	1.1	0.8	1.1	1.3	2.7

全体の傾向を見ると、「直接応募」が最も多く、43.5%であった。続いて、「家族・親戚」16.6%、「公務員試験」7.9%、「友人・知人」5.8%、「学校紹介・掲示」5.4%となっている。また、「実習を通じて」0.5%、「アルバイトから正社員」0.5%といった経路も見られた。

性別で見ると、男性の比率が高い項目として、「学校の先輩」、「家業を継いだ」、「学校紹

介・掲示」であった。一方女性の比率が高い項目として、「直接応募」、「民間の職業紹介機関」などが挙げられる。さらに項目をまとめて、「家族・親戚の紹介」、「友人・先輩の紹介」、「先生、学校の紹介」、「直接応募」、「公務員試験」の5つのカテゴリーに分けた。そうすると、「直接応募」のみが女性の比率が高く、残りの4つのカテゴリーはどれも男性の比率が高かった。

年代別について、5つのカテゴリーから見てみよう。「直接応募」は、60年代卒には17.1%に過ぎなかったのに対して、2000年代卒には76.3%にまで増加している。逆に「家族・親戚の紹介」は46.7%から6.2%への減少している。また「先生・学校の紹介」も21.8%から3.0%、「友人・知人の紹介」も13.1%から2.4%に減少している。「公務員試験」は70年代卒と2000年代卒に10%近くに増加している。

5. 職業

5.1 初職

まず大学を卒業後、初めて就いた職業（初職）について見ていくことにする。

(1) 産業

全体では、製造業が 18.9%で最も多く、続いて金融・保険・不動産業と卸売・小売業が 15.5%となっている。さらに、情報通信業 8.8%、公務 7.4%、その他のサービス業 6.3%、医療・福祉 6.2%である。無職も 5.3%と多い。

性別の違いを見ると、男性の比率が女性の比率よりも高い産業としては、製造業（+11.3ポイント）、卸売・小売業（+5.7ポイント）である。逆に女性の比率が男性の比率よりも高い産業としては、医療・福祉（+7.6ポイント）、金融・保険・不動産業（+6.1ポイント）、無職（+4.2ポイント）である。

年代別で見ると、近年増加傾向にある産業は、金融・保険・不動産業、医療・福祉であり、逆に減少傾向にある産業は、卸売・小売業である。また製造業は、80年代卒に増加するが、その後減少している。残りの産業は、年代によって比率が上下するが、一貫した傾向は見いだせない。

表 5.1 初職／産業

	建設	製造	運輸	金融・保険・不動産	卸売・小売	電気・ガス・水道	情報通信	医療・福祉	宿泊・飲食	教育・学術	生活関連、娯楽	その他のサービス	公務	その他	無職
全体	2.8	18.9	2.4	15.5	15.5	0.3	8.8	6.2	0.7	4.6	1.0	6.3	7.4	4.4	5.3
男性	3.2	24.1	2.1	12.6	18.1	0.4	9.8	2.7	0.9	3.5	0.8	6.4	8.4	3.6	3.4
女性	2.4	12.8	2.8	18.7	12.4	0.1	7.7	10.3	0.5	5.8	1.3	6.2	6.2	5.4	7.5
60～69年卒	2.3	19.8	1.9	11.4	21.3	0.4	10.3	4.9	0.0	3.4	1.1	6.1	8.7	3.8	4.6
70～79年卒	3.7	15.4	3.4	16.6	16.6	0.2	5.1	6.0	0.5	5.7	0.5	6.2	9.4	4.6	6.2
80～89年卒	2.7	25.1	1.7	12.7	18.6	0.0	11.4	3.0	1.5	5.5	0.7	4.2	6.0	3.2	3.7
90～99年卒	2.2	21.8	1.2	18.8	11.1	0.3	9.8	5.5	0.3	4.0	0.6	8.3	4.9	6.2	4.9
2000～09年卒	2.8	11.1	3.5	17.8	9.1	0.7	8.4	13.2	1.0	3.1	2.4	7.3	7.7	4.5	7.3

(2) 従業上の地位

全体で見ると、正社員が最も多く、全体の 84.7%であった。後は、臨時・アルバイト・パートが 4.2%、契約・派遣社員が 3.0%、学生が 2.5%、自営業が 2.3%と続いている。

性別では、正社員について男性が 89.8%であるのに対して、女性は 78.7%であり、差が 11.2ポイントもある。逆に臨時・アルバイト・パートは 4.7ポイント、契約・派遣社員は 3.7ポイント女性の高い比率となっている。ここから女性は男性よりも正規雇用になりやすく、非正規雇用になりやすいことを示している。

年代で見ると、正社員は 60年代卒から 90年代卒までは 8割以上であるが、2000年代卒に入って 77.9%に減少している。逆に臨時・アルバイト・パート、契約・派遣社員は、2000年代卒に増加し、7.0%になっている。バブル崩壊以降の不況による就職難の影響があらわれていると考えることができる。また自営業は、60年代卒以降ほぼ一貫して減少しており、60年代卒には 4.6%であったのが、2000年代卒には 1.0%にまで減少している。

表 5.2 初職／従業上の地位

	経営者、 役員	正社員	臨時・ イ ト・ アル バ ー ト	契約・ 社員・ 嘱託 派遣	家族 自営業 従業者	学生	無職、 休職中	家事、 子育て
全 体	0.7	84.7	4.2	3.0	2.3	2.5	1.0	1.7
男性	0.8	89.8	2.1	1.2	2.8	2.3	0.8	0.1
女性	0.5	78.7	6.8	5.0	1.7	2.7	1.1	3.6
60～69年卒	1.4	84.4	2.8	2.5	4.6	2.1	0.4	1.8
70～79年卒	0.9	84.3	4.4	1.3	2.9	1.3	0.9	4.0
80～89年卒	0.5	88.2	4.1	1.2	2.4	1.4	0.7	1.4
90～99年卒	0.6	87.0	3.0	4.1	0.6	3.3	0.9	0.6
2000～09年卒	0.0	77.9	7.0	7.0	1.0	5.0	2.0	0.0

(3) 従業上の規模

全体で見ると、1000人以上の企業への就職が 44.8%で最も多い。続いて、300～999人の 17.3%、30～299人の 17.0%、1～29人の 8.2%となっている。また官公庁は 7.4%であり、無職は 5.3%である。なお無職には学生も含まれる。

性別で見ると、男性は女性よりも大企業に就職する傾向がある。300～999人では 3.4ポイント、1000人以上では 4.9ポイント、男性の比率が高い。また 1～29人では 2.1ポイント、30～299人では 3.7ポイント、女性の比率が高い。また無職も 4.1ポイント女性の比率が高い。

年代別で見ると、1000人以上の企業への就職は、60年代卒は 33.9%と低いが、その後上昇し 90年代卒で最も高くなり（55.0%）、2000年代卒には 40.1%へと減少する。1～29人の

企業は、60年代卒は12.5%であったが、その後減少し、90年代卒には5.9%になるが、2000年代卒には9.7%に増加する。同様に300～999人の企業も90年代卒に最も比率が低くなり(13.7%)、その後増加する。30～299人の企業については、60年代卒に22.5%もあったが、80年代卒に13.4%にまで減少し、その後増加して2000年代卒には18.0%になっている。

表 5.3 初職／従業上の規模

	1～29人	30～299人	300～999人	1000人以上	官公庁	無職
全 体	8.2	17.0	17.3	44.8	7.4	5.3
男性	7.3	15.3	18.9	47.1	8.1	3.4
女性	9.3	19.0	15.4	42.2	6.6	7.5
60～69年卒	12.5	22.5	19.2	33.9	7.4	4.4
70～79年卒	8.2	17.2	20.0	38.3	10.2	6.1
80～89年卒	6.2	13.4	15.6	54.3	6.7	3.7
90～99年卒	5.9	15.8	13.7	55.0	4.7	5.0
2000～09年卒	9.7	18.0	17.6	40.1	7.3	7.3

(4) 仕事の内容（職業）

表 5.4 初職／仕事の内容（職業）

	総務事務	会計事務	営業事務	生産関連事務	その他の事務	管理的公務員	管理的役員 管理、	小売店主 飲食店主	販売外交員
全 体	19.4	6.4	29.5	3.3	4.3	0.2	0.6	4.6	3.8
男性	14.9	4.4	40.7	3.4	1.0	0.4	0.7	5.4	5.9
女性	24.6	8.7	16.8	3.2	8.1	0.0	0.4	3.5	1.5
60～69年卒	18.9	4.7	33.8	3.6	0.7	0.4	1.5	2.9	4.4
70～79年卒	23.7	8.5	25.1	3.6	3.8	0.4	0.4	4.9	3.1
80～89年卒	20.4	6.3	30.7	3.9	2.7	0.0	0.2	6.1	4.4
90～99年卒	18.8	5.2	31.8	3.6	6.1	0.0	0.6	3.3	3.9
2000～09年卒	12.4	6.2	28.3	1.4	8.6	0.3	0.3	4.8	3.4

仕事の内容については、事務職、専門職をやや細かくカテゴリーを構成し、26の分類の中から選んでもらった。全体で最も多い職業は、営業事務で29.5%、続いて総務事務(19.4%)、社会福祉専門職(6.6%)、会計事務(6.4%)、無職(5.2%)となっている。専門、管理、事務、販売、サービス、その他の6カテゴリーで見ると、事務職が62.9%で最も多く、続いて

専門職 18.9%、販売職 8.4%、サービス職 2.6%、その他 1.2%、管理職 0.8%であった。事務職と専門職で 81.8%となり、8割以上はホワイトカラーである。

表 5.5a 初職／仕事の内容（職業）（続き）

	家庭サービス 生活支援	接客、調理	その他のサービス	運輸、通信	労務	食品製造、加工	社会福祉専門職	法務・経営専門職	情報処理技術者
全 体	0.2	1.1	1.3	0.4	0.1	0.6	6.6	0.2	3.3
男性	0.0	1.1	0.7	0.4	0.2	1.0	3.7	0.3	2.9
女性	0.4	1.2	1.8	0.4	0.0	0.1	9.9	0.1	3.8
60～69年卒	0.0	0.7	1.5	1.1	0.4	1.5	6.9	0.0	0.4
70～79年卒	0.2	0.7	1.1	0.0	0.0	0.7	8.1	0.0	0.9
80～89年卒	0.0	1.9	0.5	0.2	0.0	0.5	3.9	0.5	5.1
90～99年卒	0.0	0.9	2.1	0.3	0.0	0.0	5.5	0.3	6.4
2000～09年卒	0.7	1.4	1.4	0.7	0.3	0.3	9.3	0.3	3.8

表 5.5b 初職／仕事の内容（職業）（続き）

	図書館司書 学芸員、	教員	塾等の講師	研究者	文芸家、記者	その他の専門職	農林漁業	無職
全 体	0.1	2.6	0.4	0.1	3.4	2.2	0.1	5.2
男性	0.1	2.5	0.1	0.1	4.5	2.0	0.2	3.3
女性	0.1	2.7	0.7	0.1	2.1	2.4	0.0	7.3
60～69年卒	0.0	2.2	0.0	0.4	6.5	2.5	0.7	4.4
70～79年卒	0.2	3.8	0.2	0.0	2.7	1.8	0.0	6.0
80～89年卒	0.0	3.9	0.7	0.2	2.7	1.5	0.0	3.6
90～99年卒	0.0	0.6	0.3	0.0	2.4	3.0	0.0	4.8
2000～09年卒	0.3	1.4	0.7	0.0	3.4	2.8	0.0	7.2

性別で見ると、女性よりも男性の比率が高い職業は、営業事務（+23.9ポイント）、販売外交員（+4.4ポイント）、文芸家・記者（+2.4ポイント）などがある。逆に女性の比率が高い職業として、総務事務（+9.8ポイント）、その他の事務（+7.1ポイント）、社会福祉専門職（+6.2ポイント）、会計事務（+4.3ポイント）などがある。

年代別に見ると、営業事務は、70年代卒に減少するが、30%前後で一定している。総務事務は、70年代卒をピークにその後減少しており、2000年代卒には12.4%まで減少している。若い世代ほど比率が高い職業として、その他の事務（2000年代卒の比率/60年代卒の比率=11.9）、情報処理技術者（90年代卒の比率/60年代卒の比率=17.5、2000年代卒の比率/60年代卒の比率=10.4）である。逆に若い世代ほど比率が低い職業として、文芸家・記者（2000年代卒の比率/60年代卒の比率=0.5）、生産関連事務（2000年代卒の比率/60年代卒の比率=0.4）である。

5.2 転職

表 5.6 初職離職の有無

	離職あり	離職なし
全 体	66.2	33.8
男性	57.3	42.7
女性	76.4	23.6
60～69年卒	79.1	20.9
70～79年卒	75.1	24.9
80～89年卒	61.3	38.7
90～99年卒	65.8	34.2
2000～09年卒	48.6	51.4

まず初職を離職したかどうかについて見てみよう。全体では66.2%が現在までに離職している。性別で見ると、男性の離職が57.3%であるのに対して、女性の離職が76.4%と20ポイント近くの違いがある。これは、女性は結婚、出産による離職が多いためだと考えられる。

また年代別で見ると、離職率は、60年代卒が最も高く79.1%で2000年代卒が48.6%と最も低い。卒業から年数が経つほど、離職していくことがわかる。

さらに、初職の生存率を求めた。つまり、卒業後の年数ごとの累積初職継続率である。

図4.1から、男性について入職後10年目くらいまでの傾向を見たとき、90年代卒までのグラフはほとんど一致している。つまり、転職率の減少の割合はほとんど変化しておらず、10年目くらいまでに3割程度が離職し、7割が継続している。しかし2000年大卒については、転職の比率が高く、生存率が低くなっている。10年目までに4割近くが離職している。近年仕事へのマッチングがうまくいっていないことのあらわれとも考えられる。また入職後35年以降くらいから生存率が急速に低くなっているが、これは定年退職によるものと考えられる。

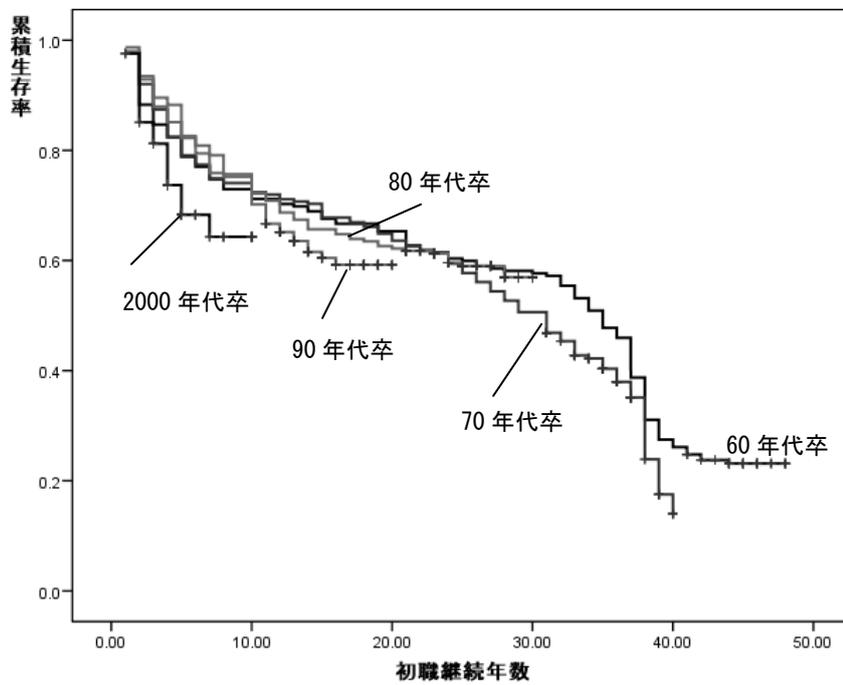


図 5.1 初職累積継続率（男性）

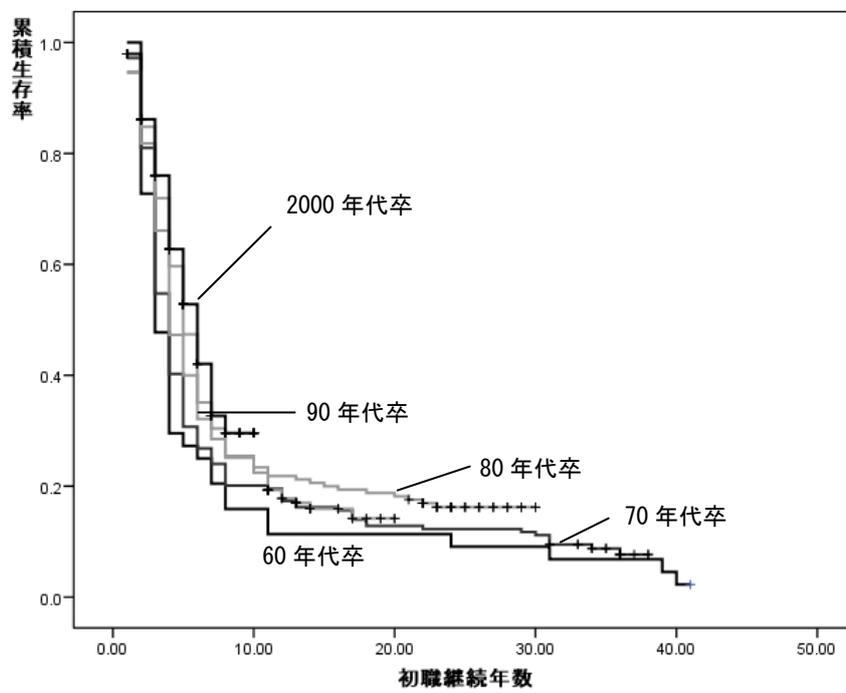


図 5.2 初職累積継続率（女性）

一方女性は、10年目くらいまでに、約8割が離職し、2割しか初職を継続していない。4.3の離職理由を見るとわかるが、女性の初職からの離職の5割以上は家事都合、つまり結

婚や出産による離職であることから、10年目までに多くの女性は結婚、出産を機に離職していることになる。年代差に着目すると、あまり大きな差はないものの、若い世代ほど離職率が低く、生存率が高いことがわかる。これは、キャリア志向が強まってきたというよりは、晩婚化により、離職時期が遅くなっていることの影響であると考えられる。

次に、転職数を求めると、転職なしが33.2%、1回は29.7%、2回が15.8%である。合わせると78.7%となり、約8割は転職2回以内である。一方5回以上転職する者の比率は、約3%と低い。男性の平均転職数は1.2回、中央値は1.0回、最頻値は0回である。一方女性の平均転職数は1.9回、中央値は1.0回、最頻値は1回である。

年代別で見ると、0回の比率は60年代卒が20.5%と最も低く、2000年代卒が最も高く51.1%である。1回は年代によってばらつきがあり、60年代卒は26.5%であるが、70年代卒には38.2%と高く、80年代卒は再び22.5%と低くなる。その後90年代卒以降は3割程度である。次に2回は、60年代卒が26.2%と最も高く、2000年代卒が11.2%と最も低い。3回以上の比率は、60年代卒は26.8%と高く、その後も21.8%、25.4%、23.4%と2割以上であるが、2000年代卒には7.2%と低い。また各年代の代表値を求めると、平均値は、60年代卒から1.8回、1.6回、1.6回、1.5回、0.8回である。また中央値は、2.0回、1.0回、1.0回、1.0回、0.0回である。

表 5.7 転職数

	0回	1回	2回	3回	4回	5回以上
全 体	33.2	29.7	15.8	9.6	5.7	6.0
男性	41.8	26.9	15.5	8.8	4.0	2.9
女性	23.2	33.0	16.1	10.5	7.7	9.6
60～69年卒	20.5	26.5	26.2	13.2	8.5	5.0
70～79年卒	24.5	38.2	15.4	9.8	5.0	6.9
80～89年卒	37.9	22.5	14.2	9.9	6.5	8.9
90～99年卒	33.2	29.5	13.9	10.7	6.6	6.1
2000～09年卒	51.1	30.5	11.2	4.0	2.0	1.1

5.3 初職離職の理由

初職を辞めたことのある回答者に対して、辞めた理由についてあてはまる理由をすべて挙げてもらった。

表 5. 8a 初職離職の理由

	仕事がつまらない	活かせない 専攻や資格が	労働時間が長い	通勤時間が長い	待遇が悪い	職場の人間関係	より魅力ある勤務先 仕事が他にあった	仕事以外のやりたい ことをしたい
全 体	12.7	3.7	12.4	3.1	16.0	10.1	24.8	10.4
男性	16.1	2.2	11.1	1.7	18.9	10.7	39.1	9.4
女性	10.2	4.8	13.4	4.2	13.9	9.7	14.2	11.1
60～69 年卒	11.5	2.1	4.7	1.0	8.9	9.4	24.0	7.8
70～79 年卒	10.0	4.3	6.0	3.4	9.4	8.9	22.9	7.4
80～89 年卒	11.9	3.4	14.3	3.8	16.4	9.2	25.3	9.6
90～99 年卒	15.6	2.2	16.7	3.3	18.8	8.3	26.1	13.8
2000～09 年卒	16.6	7.4	24.5	3.7	33.1	18.4	26.4	15.3

表 5. 8b 初職離職の理由（続き）

	家事都合	働くつもりだった 初めから短期間	健康上の理由	家業を継いだ	会社の都合	定年	その他
全 体	32.6	7.1	5.4	2.8	8.4	1.9	2.0
男性	4.3	7.0	3.7	6.1	16.9	4.1	3.0
女性	53.6	7.1	6.7	0.4	2.2	0.3	1.4
60～69 年卒	15.1	7.8	5.2	16.7	6.3	7.3	3.1
70～79 年卒	38.6	7.7	3.4	10.9	3.7	2.6	1.1
80～89 年卒	40.3	5.8	2.7	6.8	2.7	0.3	1.4
90～99 年卒	34.4	6.5	7.6	2.9	0.7	0.0	2.9
2000～09 年卒	23.3	8.0	11.0	6.7	0.6	0.0	2.5

全体で見ると、「家事都合」が 32.6%、「より魅力ある勤務先、仕事が他にあった」が 24.8%、

「待遇が悪い」が16.0%、「仕事がつまらない」が12.7%、「労働時間が長い」が12.4%、「仕事以外のやりたいことをしたい」が10.4%、「職場の人間関係」が10.1%となっている。積極的な離職理由である「より魅力ある勤務先、仕事が他にあった」や「仕事以外のやりたいことをしたい」がある一方で、「待遇が悪い」、「仕事がつまらない」、「労働時間が長い」といった消極的な離職理由も多いことがわかる。

性別での違いを見ると、女性は「家事都合」の比率が男性に比べて圧倒的に高い（男性4.3%に対して女性53.6%）。初職に関して、女性の主な離職理由が結婚、出産であることがわかる。男性は、「より魅力ある勤務先、仕事が他にあった」が女性に比べて高い比率である（男性39.1%に対して女性14.2%）。男性は女性に比べて、自分に合った、あるいは条件のよい転職先を見つけやすいという事実をあらわしているのではないかと考えられる。

年代別では、まず「家事都合」の比率は、80年代卒が最も高く、60年代卒が最も低くなっている。「より魅力ある勤務先、仕事が他にあった」という理由については、大きな変化はなく、どの年代でも25%前後の比率となっている。「待遇が悪い」、「仕事以外のやりたいことをしたい」、「仕事がつまらない」、「健康上の理由」については、若い世代ほど比率が高くなっている。こうした傾向は、初職に関して、離職率の高さともあわせると、近年マッチングがうまくいっていないことのあらわれとも読むことができるだろう。

また「家業を継いだ」、「定年」については、年長の世代ほど比率が高い。「家業を継いだ」の比率が年長世代で高いのは、年長の世代ほど、家計支持者が自営業である比率が高いことと関係していると考えられる。

5.4 現職

現在の仕事について、産業、従業上の地位、企業規模、仕事の内容の観点から、特徴を見ていく。

(1) 産業

全体で見ると、製造業が最も多く15.9%、続いて卸売・小売業の12.4%、金融・保険・不動産業の11.2%となっている。

性別による違いに注目すると、男性の比率が高い産業は、製造業（+9.9ポイント）、卸売・小売業（+4.1ポイント）、情報通信業（+3.2ポイント）である。逆に女性の比率が高い産業は、医療・福祉（+11.8ポイント）、教育・学術（+7.3ポイント）、金融・保険・不動産業（+3.3ポイント）である。

年代で見ると、卸売・小売業は60年代卒では18.6%と最も高い比率であったが、その後減少し、90年代卒では6.0%、2000年代卒では10.0%となった。製造業については、60年代卒は13.3%であったのが、80年代卒19.8%、90年代卒19.7%に増加したが、2000年代卒では11.4%に減少している。金融・保険・不動産業は逆に、60年代卒は6.7%に過ぎなかった

が、90年代卒に14.3%、2000年代卒では14.6%に増加している。同様に、情報通信業も、60年代卒の5.2%から2000年代卒の8.2%に増加している。また医療・福祉も60年代卒は7.6%であったが、70年代卒以降比率が上下するが、2000年代卒では14.6%と増えている。教育・学術は70年代卒、80年代卒に比率が高くなり、それぞれ12.3%、12.0%となる。しかしその後減少しており、2000年代卒では7.9%である。

一方公務員は、バブル経済期に卒業した80年代卒で比率が低くなる。

表 5.9 現職／産業

	建設	製造	運輸	金融・保険・不動産	卸売・小売	電気・ガス・水道	情報通信	医療・福祉	宿泊・飲食	教育・学術	生活関連、娯楽	その他のサービス	公務	その他
全 体	2.2	15.9	2.3	11.2	12.4	0.4	6.5	10.5	2.0	10.1	0.9	9.2	9.2	7.2
男性	2.5	19.9	2.7	9.9	14.0	0.6	7.8	5.7	2.1	7.2	0.5	10.3	10.4	6.3
女性	1.7	10.0	1.7	13.2	10.0	0.0	4.6	17.5	2.0	14.4	1.4	7.5	7.5	8.4
60～69年卒	3.8	13.3	2.4	6.7	18.6	1.4	5.2	7.6	2.4	9.0	1.4	10.0	10.0	8.1
70～79年卒	2.3	13.4	3.3	11.6	13.9	0.0	4.0	10.8	2.0	12.3	0.3	10.1	9.1	7.1
80～89年卒	2.0	19.8	2.4	8.5	14.4	0.2	7.6	8.8	2.7	12.0	0.5	7.8	7.3	6.1
90～99年卒	1.6	19.7	0.6	14.3	6.0	0.3	7.6	10.5	1.9	7.6	1.0	9.8	9.8	9.2
2000～09年卒	1.8	11.4	2.5	14.6	10.0	0.4	8.2	14.6	1.1	7.9	1.8	8.6	11.1	6.1

(2) 従業上の地位

表 5.10 現職／従業上の地位

	経営者、 役員	正社員	イ ト・ パ ー ト 時 間 制	社員・嘱託 契約・派遣	家族従業者 自営業	学生	無職、 休職中	家事、 子育て
全 体	8.5	50.8	8.5	7.1	6.5	0.5	7.8	10.2
男性	13.6	62.0	2.8	5.2	7.6	0.3	8.0	0.6
女性	2.8	38.0	15.0	9.4	5.2	0.9	7.6	21.3
60～69年卒	16.9	25.8	8.3	10.8	8.0	0.0	22.3	8.0
70～79年卒	11.5	42.3	9.3	8.0	9.1	0.0	7.8	11.9
80～89年卒	8.1	59.1	10.7	4.3	6.4	0.0	2.8	8.7
90～99年卒	4.9	57.2	8.7	5.1	5.6	0.0	5.6	12.8
2000～09年卒	1.2	67.6	4.1	8.8	2.4	3.2	3.8	8.8

全体で見ると、正社員が 50.0%で最も多い。現在仕事を持たない者は、家事・子育てが 10.2%、無職・求職中が 7.8%で合わせると 18.0%である。また非正規雇用については、臨時・アルバイト・パートが 8.5%、契約・派遣社員・嘱託が 7.1%である。さらに、経営者・役員が 8.5%、自営業・家族従業者が 6.5%である。

性別で見ると、男性の比率が高い働き方として、正社員 (+24 ポイント)、経営者・役員 (+10.8 ポイント) である。女性の比率が高い働き方として、家事・子育て (+20.7 ポイント)、臨時・アルバイト・パート (+12.2 ポイント)、契約・派遣社員・嘱託 (+4.2 ポイント) である。

年代別で見ると、正社員比率は 60 年代卒が 25.8%であるのに対して、2000 年代卒は 67.6%と増加している。60 年代卒は、すでに定年退職している者が多くなっていることから、非正規や無職の比率が高くなっていると考えられる。

逆に経営者・役員は 16.9% (60 年代卒) から 1.2% (2000 年代卒) に減少している。同様に自営業・家族従業者は 8.0%から 2.4%に減少している。臨時・アルバイト・パートは 60 年代卒から 90 年代卒までは 8~10%程度であるが、2000 年代卒は 4.1%と少ない。一方、契約・派遣社員・嘱託は 80 年代卒が最も少なく、4.3%である。

また家事・子育ては、70 年代卒が 11.9%、90 年代卒が 12.8%と高い比率である。一方無職・休職中は 60 年代卒が 22.3%と、他の年代卒よりも突出して多い。

(3) 企業規模

表 5.11 現職／従業上の規模

	1~29 人	30~299 人	300~999 人	1000 人以上	官公庁
全 体	23.1	20.2	13.0	33.5	10.2
男性	21.9	20.0	13.1	34.8	10.2
女性	25.0	20.4	12.9	31.6	10.1
60~69 年卒	34.7	26.4	11.1	20.8	6.9
70~79 年卒	30.8	20.9	12.4	23.1	12.7
80~89 年卒	21.0	18.4	13.8	37.7	9.2
90~99 年卒	17.5	18.8	11.1	43.0	9.6
2000~09 年卒	12.6	18.6	16.1	41.4	11.2

全体では、1000 人以上の大企業で働いている者が最も多く、33.5%である。続いて、1~29 人が 23.1%、30~299 人が 20.2%、300~999 人が 13.0%である。また官公庁は、10.2%であった。

性別で見ると、男性の比率が女性の比率よりも高い企業規模は、1000 人以上の大企業で

あり、3.2 ポイント男性のほうが多い。逆に女性は、1～29 人の企業で 3.1 ポイント多い。つまり、男性は女性よりも大企業に入りやすい。

年代別では、1000 人以上の大企業の比率は、若い世代ほど高い。逆に 1～29 人、30～299 人の企業は若い世代ほど少ない。官公庁については、70 年代卒と 2000 年代卒の比率がやや高くなっている。

(4) 仕事の内容

全体で見ると、最も多いのが無職で 18.1%、続いて営業事務の 15.2%、総務事務 14.6%、管理・管理的役員 7.8%、社会福祉専門職 5.0%、会計事務 4.7%となっている。事務職が全体の 40.4%である。

性別の違いを見てみると、男性の比率が女性の比率よりも高い仕事として、営業事務 (+15.9 ポイント)、管理・管理的役員 (+10.9 ポイント) がある。逆に女性の比率の高い仕事として、無職 (20.4 ポイント)、その他の事務 (+6.0 ポイント)、社会福祉専門職 (+4.0 ポイント)、会計事務 (+3.4 ポイント) がある。

年代別の違いを見てみよう。60 年代卒で最も多いのは無職であるが、80 年代卒は 10.9%と少ない。しかし 90 年代卒、2000 年代卒はやや増加し、15～18%程度である。

事務職を見ると、総務事務、会計事務、営業事務、その他の事務は、若い世代ほど比率が高いことから、事務職が増えていることがわかる。

管理職については、管理・管理的役員の比率は年長の世代ほど比率が高く、60 年代卒では 16.1%である。

専門職について見ると、社会福祉専門職は 60 年代卒は 2.6%であるのに対して、2000 年代卒では 7.8%にまで増加している。

表 5.12a 現職／仕事の内容（職業）

	総務事務	会計事務	営業事務	生産関連事務	その他の事務	管理的公務員	管理的役員、管理、	小売店主、飲食店主	販売外交員
全 体	14.6	4.7	15.2	1.6	4.3	0.8	7.8	3.2	2.8
男性	14.9	3.1	22.7	1.7	1.5	1.4	12.9	3.7	4.2
女性	14.2	6.5	6.7	1.6	7.5	0.2	2.0	2.7	1.2
60～69 年卒	10.3	2.9	11.9	1.3	1.3	0.3	16.1	3.9	1.9
70～79 年卒	12.5	5.3	11.1	1.6	2.6	1.6	10.9	4.5	2.2
80～89 年卒	16.1	4.1	18.4	1.9	3.6	1.3	7.1	3.4	3.9
90～99 年卒	18.1	4.9	18.1	1.6	5.4	0.3	3.6	1.8	2.8
2000～09 年卒	15.6	6.0	16.8	1.8	9.3	0.3	1.5	2.1	3.0

表 5. 12b 現職／仕事の内容（職業）（続き）

	家庭 生活 支 援 サ ー ビ ス	接 客 、 調 理	そ の 他 の サ ー ビ ス	運 輸 、 通 信	労 務	採 掘 、 建 設	食 品 製 造 、 加 工	社 会 福 祉 専 門 職	法 務 ・ 経 営 専 門 職
全 体	0.4	1.1	1.6	0.4	0.3	0.2	0.8	5.0	1.3
男性	0.1	0.8	1.4	0.7	0.6	0.4	0.7	3.2	1.9
女性	0.9	1.5	1.9	0.1	0.1	0.0	0.9	7.2	0.6
60～69年卒	0.3	1.0	2.3	1.0	1.0	0.3	1.6	2.6	1.3
70～79年卒	0.6	1.4	2.4	0.4	0.2	0.4	0.4	5.7	0.8
80～89年卒	0.6	0.9	1.3	0.2	0.4	0.0	1.3	4.5	1.5
90～99年卒	0.3	1.0	1.6	0.3	0.0	0.3	0.5	4.4	1.6
2000～09年卒	0.3	1.5	0.6	0.3	0.3	0.0	0.3	7.8	1.5

表 5. 12c 現職／仕事の内容（職業）（続き）

	情 報 処 理 技 術 者	図 書 館 司 書 、 学 芸 員	教 員	塾 等 の 講 師	研 究 者	文 芸 家 、 記 者	そ の 他 の 専 門 職	農 林 漁 業	無 職
全 体	1.8	0.3	2.9	1.7	1.4	2.7	4.3	0.2	18.1
男性	2.3	0.1	3.3	0.7	1.6	3.1	4.0	0.4	8.5
女性	1.2	0.5	2.5	2.9	1.3	2.2	4.6	0.1	29.0
60～69年卒	0.0	0.3	0.3	0.3	3.2	1.9	3.2	0.6	28.9
70～79年卒	0.6	0.2	4.5	2.4	0.4	2.8	4.9	0.2	19.6
80～89年卒	3.0	0.4	4.7	2.6	1.7	2.8	3.2	0.2	10.9
90～99年卒	2.6	0.3	0.8	1.3	2.1	2.1	6.5	0.0	17.9
2000～09年卒	2.7	0.3	2.7	1.5	0.3	3.9	3.3	0.3	15.9

5.5 初職と現職

初職と現職の関連について見てみたい。

表 5.13 初職と現職

		専門	管理	事務	販売	サービス	その他	無職
男性	専門	71.7	11.2	7.2	1.3	0.0	0.0	8.6
	管理	0.0	90.9	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1
	事務	8.3	15.3	60.8	3.2	1.3	2.3	8.7
	販売	12.3	10.4	15.1	46.2	2.8	3.8	9.4
	サービス	0.0	5.9	35.3	0.0	41.2	5.9	11.8
	その他	5.9	17.6	11.8	11.8	0.0	35.3	17.6
	無職	51.6	12.9	16.1	0.0	3.2	6.5	9.7
女性	専門	61.5	2.2	8.4	0.6	2.2	1.7	23.5
	管理	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	事務	12.8	2.0	52.7	2.0	3.4	1.0	26.1
	販売	7.3	0.0	19.5	39.0	12.2	2.4	19.5
	サービス	21.4	0.0	21.4	3.6	32.1	3.6	17.9
	その他	0.0	25.0	25.0	0.0	25.0	25.0	0.0
	無職	25.4	3.4	16.9	1.7	3.4	0.0	49.2

7つの職業カテゴリー間での初職と現職の相違を見てみると、全体では、初職と現職の一致率は高い。特に、専門職、管理職、事務職の一致率は高い。販売職、サービス職は事務職への移動が多い。

性別による違いに着目すると、女性は現職において無職が多い。特に、初職が無職の者を除けば、初職が事務職、専門職の者の無職率が高い。

男性の比率の高いパターンは、同職のままの非移動、管理職への移動、サービスから事務などである。一方女性の比率の高いパターンは、無職への移動（特に初職が事務職、専門職）、事務から専門、サービスから専門、販売から事務、販売からサービス、サービスから販売の移動パターンが多い。

年代別で、初職と現職の相違率を見ると、男性については60年代卒が69.3%、70年代卒が61.0%、80年代卒が45.7%、90年代卒が45.8%、2000年代卒が32.2%となっており、80年代卒以降は相違率が低い。一方女性は、60年代卒から順に、75.4%、64.1%、71.9%、65.4%、43.9%となっており、2000年代卒を除けば、高い比率である。

表 5.14 初職と現職の相違率

		移動あり	移動なし			移動あり	移動なし
男性	全 体	53.7	46.3	女性	全 体	61.3	38.7
	60～69 年卒	69.3	30.7		60～69 年卒	75.4	24.6
	70～79 年卒	61.0	39.0		70～79 年卒	64.1	35.9
	80～89 年卒	45.7	54.3		80～89 年卒	71.9	28.1
	90～99 年卒	45.8	54.2		90～99 年卒	65.4	34.6
	2000～09 年卒	32.2	67.8		2000～09 年卒	43.9	56.1

6. 家計支持者

6.1 家計支持者の属性

家計支持者は、父が 95.1%、母が 4.0%、祖父母が 0.5%、その他の方が 0.4%であった。性別、年代別による違いはない。

表 6.1 家計支持者の属性

	父	母	祖父母	その他の方
全 体	95.1	4.0	0.5	0.4
男性	93.8	5.2	0.3	0.6
女性	96.7	2.6	0.6	0.1
60～69 年卒	89.1	7.8	1.2	1.9
70～79 年卒	96.2	3.4	0.2	0.2
80～89 年卒	96.2	3.4	0.4	0.0
90～99 年卒	95.9	3.8	0.2	0.0
2000～09 年卒	96.6	2.7	0.5	0.3

6.2 家計支持者の職業

家計支持者の主な職業を 8 つのカテゴリーに分類した。専門職、大企業ホワイトカラー、中小企業ホワイトカラー、大企業ブルーカラー、中小企業ブルーカラー、自営ホワイトカラー、自営ブルーカラー、農業である。

表 6.2 家計支持者の職業

	専門	大 W	中小 W	大 B	中小 B	自営 W	自営 B	農業
全 体	15.7	28.8	18.8	4.4	4.3	19.2	6.1	2.6
男性	13.6	25.9	19.1	4.6	4.1	21.2	7.7	3.7
女性	18.3	32.3	18.5	4.2	4.5	16.8	4.2	1.3
60～69 年卒	13.2	22.3	18.1	2.6	1.6	30.3	5.2	6.8
70～79 年卒	17.1	28.2	16.5	4.8	4.4	18.7	7.2	3.2
80～89 年卒	11.1	29.2	18.7	5.8	4.7	21.4	6.8	2.3
90～99 年卒	18.5	29.1	23.0	4.3	4.3	14.4	5.6	0.8
2000～09 年卒	19.3	34.6	18.2	3.7	6.1	12.4	5.2	0.6

全体の比率を見ると、大企業ホワイトカラーが最も多く 28.8%、続いて自営ホワイト (19.2%)、中小ホワイト (18.8%)、専門 (15.7%) となっている。また農業 (2.6%)、中小ブルー (4.3%)、大ブルー (4.4%)、自営ブルー (6.1%) の比率は低い。

性別から見ると、女性に比べて男性の比率の高い職業は、自営ホワイト (+4.5 ポイント)、自営ブルー (+3.5 ポイント)、農業 (+2.4 ポイント) である。逆に女性の比率の高い職業は、大ホワイト (+6.3 ポイント)、専門 (+4.7 ポイント) である。

また年代別に見ると、大きな特徴は、専門、大ホワイトは若い世代ほど比率が高く、自営ホワイト、農業は若い世代ほど比率が低いということである。

6.3 家計支持者の学歴

全体では、大卒が 39.9% で最も多い。大卒 39.9% の内訳は、関西学院大学卒は 5.3% で、関学以外の大学出身が 34.6% であった。大卒以外だと、高卒が 30.2%、中卒が 16.8%、短大・高専卒が 8.6%、大学院卒が 2.1% であった。

表 6.3 家計支持者の学歴

	新制中学・ 旧制小学校	新制高校・ 旧制中学校	新制各種 専門学校	新制短大・高専、 旧制高校	関西学院大学	関学以外の大学	大学院	その他
全 体	16.8	30.2	2.0	8.6	5.3	34.6	2.1	0.3
男性	22.7	34.0	2.1	9.2	5.0	26.0	0.9	0.2
女性	10.1	25.9	1.9	7.8	5.7	44.6	3.4	0.5
60～69 年卒	28.6	33.2	0.6	12.9	4.3	18.5	1.5	0.3
70～79 年卒	27.8	29.0	1.2	12.7	3.5	25.0	0.4	0.6
80～89 年卒	16.2	32.2	2.4	9.9	3.4	34.4	1.2	0.2
90～99 年卒	7.5	30.8	2.9	2.7	8.7	43.8	3.6	0.0
2000～09 年卒	2.4	26.2	2.9	3.7	7.5	52.4	4.3	0.5

性別で比較してみると、中卒、高卒は男性の比率が女性の比率よりも大きく、逆に大卒については女性の比率が高い。

年代別で見ると、中卒は 60 年代卒には 28.6% であったが、2000 年代卒には 2.4% にまで減少している。高卒は、60 年代卒が 33.2% で 2000 年代卒は 26.2% であり、減少傾向にあるが大きな差ではない。また短大・高専卒も 60 年代卒では 12.9% であったのが、2000 年代卒には 3.7% にまで減少している。一方、大卒は、関学卒について見ると、90 年代卒以降比率が大きくなっていることがわかる。関学以外の大学については、一貫して上昇傾向にあり、

60年代卒では18.5%であったのに対して、2000年代卒では52.4%であった。

家計支持者の学歴は、高校進学率、大学進学率の変化に対応していると考えられる。そして、今回の調査では若い世代ほど女性が多いことが、性別による比率の違いにつながっていると考えることができる。

7. 家族

7.1 結婚

(1) 結婚の有無

まず結婚の有無について見てみよう。

表 7.1 結婚の有無

	未婚	既婚	再婚	離死別
全 体	18.6	75.3	2.2	3.9
男性	13.1	81.3	2.8	2.8
女性	25.1	68.2	1.4	5.3
60～69 年卒	5.0	85.8	2.8	6.3
70～79 年卒	5.2	89.2	1.7	3.9
80～89 年卒	8.1	84.2	3.2	4.5
90～99 年卒	22.2	71.1	2.7	3.9
2000～09 年卒	61.8	37.1	0.0	1.1

全体では、75.3%が既婚、2.2%が再婚、3.9%が離死別であり、18.6%が未婚である。

性別で見ると、女性の未婚者が男性よりも 11.9 ポイント多く、既婚者が 13.1 ポイント少ない。

年代別では、未婚者について 90 年代卒では 22.2%、2000 年代卒では 61.8%となっている一方で、60 年代卒から 80 年代卒は 5～8%にとどまっている。また離死別について、60 年代卒が 6.3%と比率がやや高い。

(2) 結婚年齢

初婚年齢について、全体では 25 歳から 28 歳の比率が高い。この 4 年間に結婚する者は 56.4%である。平均初婚年齢は、28.0 歳、中央値は 27 歳、最頻値は 26 歳である。

性別で見ると、男性は 27 歳、女性は 26 歳が最頻値である。平均値は、男性が 28.7 歳、女性が 27.1 歳となっており、男性のほうが、初婚年齢が高い。

また年代別に見ると、25～28 歳の間結婚する者の比率は、60 年代卒から 60.1%、56.3%、53.3%、53.0%、66.4%となっている。2000 年代卒の比率が高いのは、まだ結婚していない者が多いためである。

表 7.2 結婚年齢

	全体	男性	女性	60～69年卒	70～79年卒	80～89年卒	90～99年卒	2000～09年卒
18歳	0.1	-	0.1	-	-	-	-	0.8
19歳	0.1	-	0.1	-	-	0.2	-	-
20歳	0.1	0.1	-	-	-	0.2	-	-
21歳	0.2	0.2	0.3	0.7	0.2	0.2	-	-
22歳	0.6	0.1	1.2	0.7	1.0	0.2	-	1.5
23歳	2.4	1.0	4.3	3.3	3.9	1.8	0.9	0.8
24歳	5.9	3.6	9.0	5.3	9.6	3.5	3.8	6.9
25歳	12.7	9.0	17.8	10.0	17.6	13.1	8.2	10.7
26歳	16.1	14.0	18.9	15.6	15.1	15.0	17.0	22.1
27歳	15.7	16.1	15.3	17.6	14.5	14.6	16.7	17.6
28歳	11.8	13.3	9.8	16.9	9.2	10.6	11.0	16.0
29歳	9.2	11.1	6.5	8.0	8.2	9.7	9.8	12.2
30歳	7.3	8.8	5.3	9.0	5.5	8.2	7.3	6.9
31歳	4.4	5.8	2.6	4.3	3.7	4.4	6.6	2.3
32歳	3.4	4.4	1.9	2.7	2.9	3.5	5.7	0.8
33歳	3.1	4.0	1.9	1.7	3.3	3.3	4.7	1.5
34歳	1.4	1.6	1.1	0.7	0.2	2.7	2.8	-
35歳	1.3	1.8	0.7	1.7	1.4	1.8	0.6	-
36歳	0.9	1.0	0.8	0.7	0.2	1.3	2.2	-
37歳	0.6	0.6	0.6	0.3	0.8	0.7	0.6	-
38歳	0.8	1.2	0.1	0.0	0.4	1.5	1.3	-
39歳	0.8	0.8	0.7	1.0	0.8	1.3	-	-
40歳	0.1	-	0.3	-	0.4	-	-	-
41歳	0.4	0.7	-	-	0.2	1.1	0.3	-
42歳	0.1	0.1	-	-	-	-	0.3	-
43歳	-	-	-	-	-	-	-	-
44歳	0.1	-	0.1	-	-	0.2	-	-
45歳	0.1	0.1	0.1	-	0.4	-	-	-
46歳	0.1	0.2	-	-	0.4	-	-	-
47歳	0.1	0.1	0.1	-	-	0.4	-	-
48歳	0.1	-	0.1	-	-	0.2	-	-
49歳	-	-	-	-	-	-	-	-
50歳	-	-	-	-	-	-	-	-
51歳	-	-	-	-	-	-	-	-
52歳	-	-	-	-	-	-	-	-
53歳	-	-	-	-	-	-	-	-
54歳	-	-	-	-	-	-	-	-
55歳	0.1	0.1	-	-	0.2	-	-	-

7.2 配偶者

(1) 職業

配偶者の職業について、家計支持者と同様に 8 つの職業と無職の 9 つのカテゴリーに分けて分析をした。

全体の傾向を見ると、最も多いのは無職の 38.0%、続いて大企業ホワイト 17.2%、中小企業ホワイト 13.5%、自営ホワイト 12.1%となっている。

性別による違いに注目すると、男性については、無職が 58.6%で最も多い。つまり専業主婦が約 6 割となっている。続いて自営ホワイト、中小ホワイト、大企業ホワイトとなっている。女性については、最も多いのは、大企業ホワイトであり 32.1%となっている。続いて、中小ホワイト、専門、自営ホワイトとなっている。以上から、妻については専業主婦かホワイトカラー、夫についてはホワイトカラーが大半である。

年代別による違いは、若い世代ほど大企業ホワイトの比率が高く、無職の比率が低くなっている。

表 7.3 配偶者の職業

	専門	大 W	中小 W	大 B	中小 B	自営 W	自営 B	農業	無職
全 体	9.4	17.2	13.5	3.3	2.4	12.1	2.8	1.2	38.0
男性	4.8	7.2	9.4	2.3	2.0	11.8	2.8	1.1	58.6
女性	16.2	32.1	19.5	4.8	3.0	12.6	2.8	1.4	7.6
60～69 年卒	3.5	4.6	6.3	0.4	1.1	12.0	0.7	1.4	70.1
70～79 年卒	10.5	14.0	14.5	3.1	2.7	10.9	3.3	1.1	39.9
80～89 年卒	8.3	18.2	16.6	5.1	2.5	16.2	3.2	1.6	28.2
90～99 年卒	12.8	24.8	13.1	2.7	3.0	10.1	3.4	1.0	29.2
2000～09 年卒	15.0	35.4	15.7	6.3	2.4	7.9	3.1	0.0	14.2

(2) 学歴

配偶者の学歴について、全体の傾向を見ると、関学以外の大学卒が 39.0%で最も多い。続いて、短大・高専卒の 19.8%、関西学院大学卒 14.9%、高卒 16.1%となっている。大卒者は、53.9%、大学院卒も合わせると 59.4%と約 6 割であり、高学歴であることがわかる。

性別の違いに注目すると、男性つまり男性の妻の学歴は、高卒(24.7%)、短大・高専卒(32.5%)が多い。一方女性つまり女性の夫の学歴は、関西学院大学卒(22.4%)、関学以外の大学卒(55.9%)、大学院卒(13.8%)の比率が高い。

年代別には、高卒、短大・高専の比率は若い世代ほど低くなっている。逆に、関西学院大学卒、関学以外の大学卒の比率は高くなっている。高学歴化が進んでいることがわかる。

表 7.4 家計支持者の学歴

	中学	高校	専門 各種 学校	短大・ 高専	関西 学院 大学	関 学 以 外 の 大 学	大 学 院
全 体	0.2	16.1	3.5	19.8	14.9	39.0	6.5
男性	0.3	24.7	4.3	32.5	9.6	27.2	1.4
女性	0.1	3.8	2.3	1.6	22.4	55.9	13.8
60～69 年卒	0.3	42.2	2.9	20.8	7.8	23.4	2.6
70～79 年卒	0.2	15.0	2.7	20.0	16.2	40.5	5.4
80～89 年卒	0.4	10.9	3.3	23.2	13.8	41.7	6.5
90～99 年卒	0.0	2.9	5.5	19.5	19.2	42.3	10.4
2000～09 年卒	0.0	7.6	3.8	6.1	19.7	52.3	10.6

7.3 子供

(1) 子供数

結婚経験のある者に関して、子供数をまとめた。

表 7.5 子供の数

	0人	1人	2人	3人	4人	5人
全 体	15.4	20.7	46.6	15.9	1.3	0.1
男性	11.2	20.1	50.3	16.9	1.3	0.1
女性	21.1	21.4	41.5	14.6	1.3	0.1
60～69 年卒	6.3	16.3	53.5	20.9	2.7	0.3
70～79 年卒	9.2	14.5	53.1	20.8	2.2	0.2
80～89 年卒	12.4	19.3	50.6	17.3	0.4	0.0
90～99 年卒	23.0	28.7	40.4	7.6	0.3	0.0
2000～09 年卒	51.9	38.9	7.6	1.5	0.0	0.0

全体では、2人が最も多く46.6%、続いて1人が20.7%、3人が15.9%、0人が15.4%となっている。4人以上は1.4%に過ぎない。

性別による違いを見ると、男性は2人が8.8ポイント高く、女性は0人が9.9ポイント高くなっている。

年代別では、60年代卒、70年代卒は、3人が20%以上もあり、多い。80年代卒に17.3に

下がり、90年代卒になると7.6%になる。逆に0人は、60年代卒が6.3%であったのが、70年代卒以降比率が上がり、2000年代卒には51.9%になっている。平均値は、60年代卒から1.82、1.79、1.57、1.01、0.20となっており、少子化傾向が読み取れる。

(2) 子供年齢

子供の平均年齢について、全体の傾向としては、第1子から第5子までほぼ21歳から24歳くらいの年齢であることがわかる。

性別の違いについては、男性よりも女性の子供の年齢のほうがやや若い。これは、男性の年齢が女性よりも若いことによると考えられる。

年代別では、第1子についてみると、60年代卒から順に37.1歳、28.3歳、17.9歳、7.2歳、1.6歳となっている。第2子についても同様にほぼ10歳きざみで平均年齢が低くなっている。

また、第1子と第2子の年齢差は、60年代卒から順に2.3歳、2.6歳、2.4歳、1.9歳、0.7歳となっており、2000年代卒を除けば、2～3歳程度となっている。また第2子と第3子の年齢差は、60年代卒から順に2.3歳、2.3歳、2.6歳、0.6歳、0.4歳となっており、80年代卒より年長の世代では2～3歳程度となっている。

表 7.6 子供の平均年齢

	第1子	第2子	第3子	第4子	第5子
全 体	22.4	21.6	21.0	22.9	24.0
男性	24.0	23.1	21.9	25.9	28.0
女性	20.0	19.2	19.5	18.6	20.0
60～69年卒	37.1	34.8	32.4	30.9	28.0
70～79年卒	28.3	25.7	23.4	20.4	20.0
80～89年卒	17.9	15.5	12.9	9.5	-----
90～99年卒	7.2	5.3	4.7	7.0	-----
2000～09年卒	1.6	0.9	0.5	-----	-----

7.4 同居人

現在一緒に生活している方について、8つのカテゴリーから選んでもらった。

表 7.7 同居人

	配偶者 (同居)	父母(同居)	兄弟姉妹 (同居)	子ども (同居)	配偶者の 父母(同居)	祖父母	その他
全 体	83.1	20.0	5.5	54.4	3.5	1.8	1.3
男性	91.3	15.9	1.9	57.6	3.0	1.2	1.0
女性	73.6	24.7	9.6	50.8	4.1	2.6	1.7
60～69 年卒	92.2	9.8	1.0	35.8	2.9	0.7	1.6
70～79 年卒	92.7	15.8	0.6	56.4	6.5	1.2	1.0
80～89 年卒	90.6	12.4	0.9	77.4	3.6	0.2	1.3
90～99 年卒	84.5	16.7	4.0	66.7	2.0	0.6	0.3
2000～09 年卒	43.9	53.7	27.6	19.4	0.7	8.2	2.7

全体での傾向を見ると、83.1%の人が配偶者と同居している。また子供との同居は 54.4%である。次に父母との同居は 20.0%、兄弟姉妹との同居は 5.5%である。さらに、配偶者の父母とは 3.5%、祖父母 1.8%、その他 1.3%となっており、比率は低い。

性別で見ると、男性は配偶者との同居が 91.3%と女性に比べて高い比率である。逆に父母との同居は女性の比率が 24.7%で男性よりも高い。

また年代別で見ると、60年代卒から80年代卒までは配偶者との同居が9割を超えているが、90年代卒には84.5%、2000年代卒には43.9%と低くなっている。また子供との同居は、80年代卒（40歳代）の同居率が最も高く77.4%である。父母との同居は、2000年代卒が最も高く、53.7%である。

さらに、特に配偶者、父母、子供について、どのような組み合わせで同居しているのかを分析してみよう。そこで、カテゴリーを配偶者、父母、子供、その他（兄弟姉妹、祖父母など含む）の4カテゴリーとし、どのような組み合わせで同居しているかをまとめることとした。

まず、一人暮らしの者は、全体の11.5%である。また夫婦のみは24.7%、夫婦と子供は39.8%である。また親とのみ同居している者は、6.8%である。さらに夫婦と子供と父母と同居している者は3.7%である。

年代別に見ると、一人暮らしの者は、若い世代ほど比率が高い。夫婦のみは60年代卒が最も多く52.0%である。夫婦と子供の世帯は60年代卒では24.6%であるのに対して80年代卒には61.0%、90年代卒には51.3%に増加している。親とのみ同居している者の比率は、60年代卒は0.9%に過ぎないが、2000年代卒には17.8%に増加している。また「親とその他」

と同居している者の比率は、2000年代卒に22.7%あり、90年代卒までと大きく異なる。

表 7. 8a 同居人（組み合わせ）

	一人暮らし	その他のみ	子供のみ	子供＋その他	親のみ	親＋その他	親＋子供
全 体	11.5	1.2	1.4	0.4	6.8	4.7	0.6
60～69年卒	6.7	1.5	2.1	1.5	0.9	0.3	0.9
70～79年卒	7.2	0.6	1.5	0.4	3.6	0.0	0.8
80～89年卒	7.0	0.8	2.4	0.2	4.4	0.4	0.6
90～99年卒	15.5	0.7	0.7	0.0	8.4	2.6	0.7
2000～09年卒	23.2	2.6	0.0	0.0	17.8	22.7	0.0

表 7. 8b 同居人（組み合わせ）（続き）

	配偶者のみ	配偶者＋その他	配偶者＋子供	配偶者＋子供＋その他	配偶者＋親	配偶者＋親＋その他	配偶者＋親＋子供	子供＋その他 配偶者＋親＋
全 体	24.8	1.1	39.8	2.2	1.7	0.1	3.7	0.0
60～69年卒	52.0	1.8	24.6	0.6	3.3	0.0	3.6	0.0
70～79年卒	29.9	2.4	38.6	4.7	3.8	0.2	6.2	0.2
80～89年卒	13.9	0.8	61.0	2.4	0.8	0.0	5.4	0.0
90～99年卒	15.8	0.2	51.3	1.7	0.2	0.2	1.9	0.0
2000～09年卒	18.3	0.0	14.1	0.5	0.3	0.3	0.3	0.0

7.5 女性のライフコース

女性の回答者のみに、大学卒業後の働き方について、尋ねた。卒業時の希望と、実際のライフコースと、現在考える理想のライフコースについて、以下の9つのパターンの中から選んでもらった。

① 結婚や出産の後も、家事や育児をしながら、勤め続ける（結婚出産継続型）
② 結婚や出産で一時期家庭に入り、育児が一段落した後再び働く（結婚出産中断型）
③ 結婚したら、勤めをやめて家庭に入る（結婚離職型）
④ 出産したら、勤めをやめて家庭に入る（出産離職型）
⑤ 勤めに出ない（無職型）
⑥ 結婚をせずに、勤め続ける（未婚型）
⑦ 出産をせずに、勤め続ける（未出産型）
⑧ その他（ ）
⑨ わからない

(1) 卒業時

全体の傾向を見ると、結婚出産継続型が31.6%で最も多い。次に結婚離職型が24.3%、結婚出産中断型が23.2%となっている。この3つのパターンを合わせると、79.1%となり、約8割の回答者はこの3つのパターンのどれかを、卒業時に希望していたことになる。結婚出産継続型が最も多いとはいえ、結婚離職型と出産離職型を合わせると32.8%となり、結婚、出産により離職するかどうかについて、意見が2つに別れていることがわかる。また未婚型は2.1%に過ぎず、大半の女性は卒業時に結婚を望んでいることがわかる。

表 7.9 女性のライフコース（卒業時）

	結婚 出産 継続型	結婚 出産 中断型	結婚 離職型	出産 離職型	無職型	未婚型	未 出産型	その他	わ か ら な い	無 回 答
全 体	31.6	23.2	24.3	8.5	2.3	2.1	0.7	1.2	3.5	2.7
60～69年卒	20.0	27.7	26.2	3.1	10.8	0.0	4.6	1.5	3.1	3.1
70～79年卒	21.2	19.0	37.2	11.3	2.6	1.3	0.0	1.7	1.7	3.9
80～89年卒	29.0	22.9	25.7	10.0	3.3	1.4	1.0	1.4	3.3	1.9
90～99年卒	37.8	23.0	19.6	8.7	0.4	1.3	0.4	0.9	6.1	1.7
2000～09年卒	39.9	26.1	15.7	6.0	0.7	4.5	0.4	0.7	3.0	3.0

年代別に見ると、結婚出産継続型は、60年代卒には20.0%であったものが、その後の世

代では比率が上昇しており、2000年代卒には39.9%である。逆に結婚離職型は、60年代卒26.2%、70年代卒37.2%と高い比率であるが、その後減少し、2000年代卒には15.7%になっている。結婚出産中断型については、60年代卒に27.7%と高く、70年代卒には19.0%に下がっている。しかしその後上昇し、2000年代卒は60年代卒とほぼ同水準の26.1%である。また出産離職型は70年代卒と80年代卒の女性に多いが、2000年代卒には6.0%にまで減少している。さらに、無職型は、60年代卒には10.8%いたが、70年代卒以降は非常に少なく、2000年代卒は0.7%に過ぎない。

(2) 実際

全体の傾向を見ると、結婚出産中断型が23.4%で最も多い。次に結婚出産継続型が19.8%、結婚離職型が19.3%となっている。この3つのパターンを合わせると、62.5%である。さらに、未婚型が10.5%、出産離職型が10.1%である。

表 7.10 女性のライフコース（実際）

	結婚 出産 継続型	結婚 出産 中断型	結婚 離職型	出産 離職型	無 職型	未 婚型	未 出 産 型	そ の 他	わ か ら な い	無 回 答
全 体	19.8	23.4	19.3	10.1	3.1	10.5	1.9	5.1	3.1	3.8
60～69年卒	10.8	26.2	29.2	9.2	7.7	3.1	3.1	4.6	1.5	4.6
70～79年卒	16.0	28.1	27.3	8.7	5.6	3.5	1.7	5.2	0.4	3.5
80～89年卒	18.1	31.4	17.6	11.0	3.3	8.6	2.4	5.2	0.0	2.4
90～99年卒	23.0	18.3	19.1	13.0	1.3	13.0	2.2	5.2	1.7	3.0
2000～09年卒	23.9	16.8	11.6	8.2	1.1	17.5	1.1	4.9	9.3	5.6

年代別で見ると、結婚出産中断型は、60年代卒から80年代卒のでは25～30%程度と高い比率である。90年代卒以降は低くなるが、これはまだ結婚出産に至っていない人が多いためと考えられる。結婚離職型は、60年代卒では29.2%と高いが、その後減少し、80年代卒は17.6%、90年代卒は19.1%、2000年代卒は11.6%となっている。ただこれも、いずれ再就職するつもりであるが、まだ結婚後間もないので、離職したままという人も含まれていることが考えられる。また無職型も減少している。逆に結婚出産継続型は、60年代卒には10.8%であったものが、2000年代卒には23.9%にまで増加している。同様に未婚型も増えている。

(3) 希望

全体で最も多いのは、結婚出産中断型で41.8%である。続いて結婚出産継続型が35.7%であり、合わせて77.5%になる。あとは、結婚離職型が5.2%、出産離職型が4.6%であり、これらの比率は非常に低い。

表 7.11 女性のライフコース（希望）

	結婚出産 継続型	結婚出産 中断型	結婚離職型	出産離職型	無職型	未婚型	未出産型	その他	わからない	無回答
全体	35.7	41.8	5.2	4.6	1.4	1.4	0.6	2.9	3.5	3.0
60～69年卒	23.1	50.8	9.2	1.5	3.1	3.1	1.5	1.5	6.2	0.0
70～79年卒	37.4	43.5	4.3	2.6	1.7	0.0	0.0	2.6	3.0	4.8
80～89年卒	37.8	41.6	4.3	3.3	1.9	3.3	0.0	1.4	4.3	1.9
90～99年卒	38.4	38.9	3.9	3.5	0.9	0.9	1.3	6.1	3.9	2.2
2000～09年卒	33.2	40.7	6.7	9.0	0.7	1.1	0.7	1.9	2.2	3.7

年代別で見ると、結婚出産中断型は、やや減少傾向にある。60年代卒は50.8%であったが、2000年代卒は40.7%である。結婚出産継続型については60年代卒が最も低く、23.1%であり、70年代卒から90年代卒までは37～39%である。結婚離職型はやや減少傾向、出産離職型は増加傾向にある。

(4) 卒業時の希望と実際

卒業時の希望と実際のライフコースが、結婚出産継続型、結婚出産中断型、結婚離職型、出産離職型の4つのパターンについて、どのような関係にあるのかについて調べてみた。

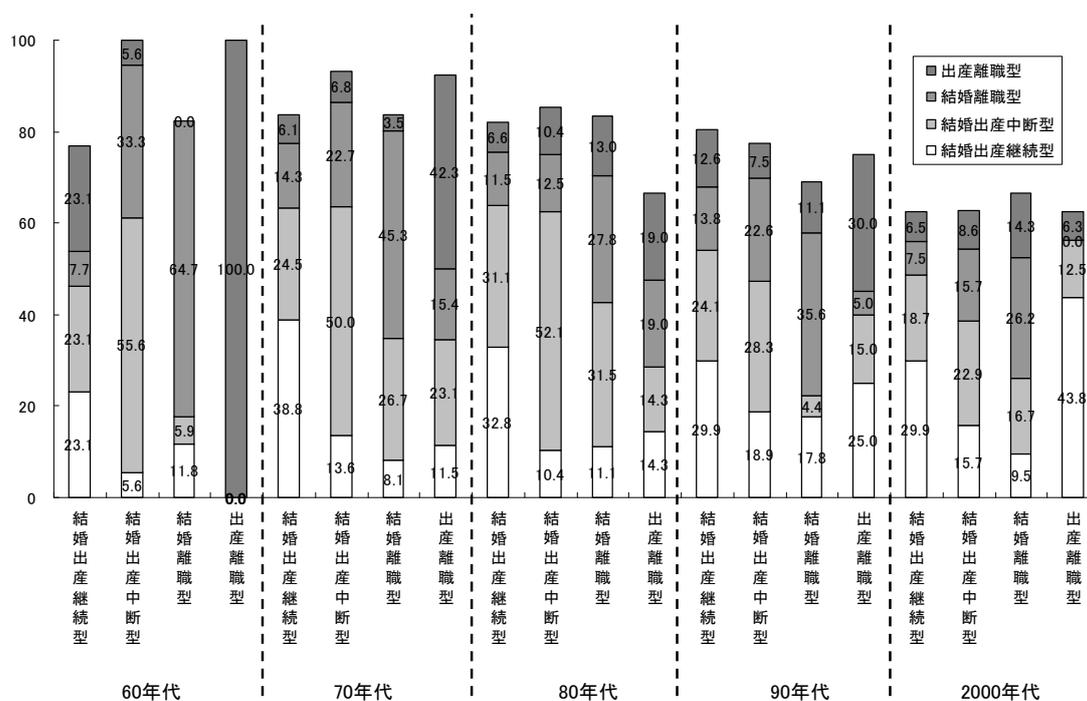


図 7.1 卒業時の希望別実際のライフパターン（年代）

まず、この4つのパターンについて希望と実際のライフコースが一致する比率は、60年代卒は52.0%であり、70年代卒以降は44.4%、34.8%、30.7%、25.5%と、若い世代ほど希望と実際のライフコースがずれていることがわかる。

60年代卒は一致率が高いが、数の少ない出産離職型除けば、結婚離職型の一致率が高い。70年代卒は、相対的に結婚出産中断型の一致率が高く、結婚出産継続型の一致率が低い。80年代卒も結婚出産中断型の一致率が高く、出産離職型の一致率（19.0%）が低い。90年代卒になると、最も一致率が高いのが結婚離職型となる（35.6%）。結婚出産継続型では、結婚出産中断型、結婚出産中断型では結婚離職型、出産離職型では結婚出産継続型の比率が高い。2000年代卒は、結婚出産継続型が最も高いが、29.9%に過ぎない。その一方で未婚型が全体の17.5%であることから、まだ結婚、出産の時期に至っていないことにより、一致率が低くなっていると考えられる。

8 人生の転機

8.1 転機の時期

転機の年齢を 0～17 歳、18～22 歳、23～29 歳、30～39 歳、40 歳以上の 5 つのカテゴリ
ーに分けた。

表 8.1 転機の時期

	0～17 歳	18～22 歳	23～29 歳	30～39 歳	40 歳以上
全体	7.8	23.1	36.3	19.8	13.0
男性	7.7	21.9	28.7	24.0	17.7
女性	7.9	24.5	44.6	15.2	7.9
60～69 年卒	2.4	14.6	27.6	24.8	30.5
70～79 年卒	4.7	13.1	37.3	19.5	25.4
80～89 年卒	3.0	16.9	38.1	30.6	11.4
90～99 年卒	9.6	28.2	40.2	21.0	1.1
2000～09 年卒	19.6	44.2	34.7	1.5	0.0

まず全体で見ると、最も多いのは 23～29 歳であり 36.3%となっている。続いて、18～22 歳で 23.1%、30～39 歳の 19.8%、40 歳以上の 13.0%、0～17 歳の 7.8%となっている。大学時代から卒業後の 20 歳代が人生において最も重要な時期であることがわかる。

性別の違いに注目すると、女性は 23～29 歳が男性よりも 15.8 ポイント高く、男性は 30～39 歳で 8.8 ポイント、40 歳以上で 9.8 ポイント高くなっている。

年代別で見ると、若い世代では若い年齢での転機、年長の世代では高齢での転機といった時期の違いが見られる。60 年代卒では 40 歳以降の転機が 30.5%にのぼる一方で、17 歳まで転機は 2.4%に過ぎない。それに対して 2000 年代卒では、17 歳までの転機は 19.6%にのぼる。

8.2 転機の内容

転機の内容について、自由回答で回答してもらっている。その内容を、以下の 8 つに分類した。複数の内容を回答している人もいる。8 つのカテゴリのそれぞれは、自分が経験したものに限らない。つまり例えば病気は、自分が経験した病気だけではなく、家族の病気も含まれている。

(a) 仕事関係（就職、転勤、転職、起業、定年など）
(b) 家族関係（結婚、出産、子育て、家族の病気、死など）
(c) 学業・大学関係（入学、浪人、サークル、部活など）
(d) 海外経験（留学、海外勤務など）
(e) 病気（病気、怪我、事故）
(f) 人との出会い（先生、友人との出会いなど）
(g) 社会的事件・出来事（阪神淡路大震災など）
(h) その他

表 8.2 転機の内容

	仕事	家族	学業	海外経験	病気	出会い	社会的 事件	その他
全 体	36.2	35.7	22.0	4.1	5.1	7.7	4.7	1.4
男性	46.4	23.5	22.0	4.3	3.9	7.6	6.1	0.7
女性	25.5	48.5	22.1	3.8	6.3	7.7	3.2	2.1
60～69 年卒	54.0	27.7	13.6	6.1	3.8	9.9	5.6	0.0
70～79 年卒	38.0	41.1	14.6	3.6	2.6	10.7	4.7	1.3
80～89 年卒	32.2	44.2	15.2	3.6	5.8	7.1	4.8	0.5
90～99 年卒	30.7	34.9	27.7	3.4	6.4	6.1	6.1	1.7
2000～09 年卒	32.9	24.2	39.9	4.7	6.7	4.7	2.0	3.4

まず全体の傾向を見ると、最も多いのが仕事関係であり、36.2%であり、続いて家族関係が35.7%である。さらに学業関係が22.0%となっている。

性別で比較すると、男性は仕事関係の比率が高く、女性は家族関係の比率が高い。その差はそれぞれ20ポイント以上と、大きい。そのほかの項目については大きな差はない。

年代別に見ると、仕事関係については、若い世代ほど比率が低くなっている。年齢が高くなるに従って、転職、退職、転勤、起業といった仕事上の様々な経験をするることによって、その経験が転機になると考えられる。次に家族については、70年代卒と80年代卒が4割を超えており、高い比率となっている。70年代卒、80年代卒の女性が多いことと、80年代卒以降の卒業生は結婚や出産、子育てといった家族に関するさまざまな経験をしている年代であることによると考えられる。学業関係については、若い世代ほど比率が高くなっている。若い世代は学業のみが重要なイベントであることが多いが、年齢を重ねていくに従って家族イベントや仕事イベントを経験することで、学業の比率が下がっていくと考えられる。

9. 職業意識

9.1 仕事満足感

現在の仕事についての満足感を尋ねたところ、全体では28.9%が「とても満足している」と回答し、46.6%が「やや満足している」と回答している。合わせると、75.5%の人が現在の仕事に満足している。逆に不満については、「あまり満足していない」は7.0%、「まったく満足していない」が1.9%と低い比率となっている。

性別で見ると、ほとんど性別による違いは見られない。

また年代で見ると、年長の世代ほど、満足度が高いことがわかる。60年代卒では40.5%が「とても満足している」と回答しているのに対して、2000年代卒では20.2%に過ぎない。

表 9.1 仕事満足感

	とても満足	やや満足	どちらとも いえない	あまり 満足ではない	まったく 満足ではない
全 体	28.9	46.6	15.7	7.0	1.9
男性	31.3	44.6	15.8	6.6	1.8
女性	25.3	49.7	15.5	7.5	2.0
60～69 年卒	40.5	45.9	9.5	4.1	0.0
70～79 年卒	33.0	42.7	17.6	5.4	1.3
80～89 年卒	26.7	49.1	15.2	6.2	2.8
90～99 年卒	30.2	43.0	17.4	7.5	1.9
2000～09 年卒	20.2	52.0	15.0	10.7	2.1

9.2 仕事で重視する側面と充足されている側面

仕事をおこなっていく上で、どのような点を重視するか、また現在の仕事において、どの程度充足しているかを尋ねた。具体的には、以下の14の項目について尋ねている。

(a) 仕事のやり方やペースを決められる
(b) 自分の知識・アイデアを活かせる
(c) 学習を続け、深められる
(d) チャレンジングな仕事である
(e) 社会的評価・ステータスがある
(f) 高い収入が得られる
(g) 雇用と身分の保障がある
(h) 将来のキャリアの見通しがある
(i) チームの中で仕事ができる
(j) 社会的に役立つ仕事ができる
(k) 職場の雰囲気がよい
(l) 余暇に費やす時間的ゆとりがある
(m) 仕事でさまざまな経験ができる
(n) 仕事と家事の両立できる

(1) 仕事で重視する側面

以下では、それぞれの項目について、「非常に重視」を5点、「やや重視」を4点、「どちらでもない」を3点、「あまり重視せず」を2点、「全く重視せず」を1点としたときの平均点の値によって傾向を見ていく。

表 9.2 仕事で重視する側面

	仕事のやり方	知識の活用	学習継続	チャレンジ	社会的評価	高い収入	雇用の保障	将来の見通し	チームでの仕事	社会的貢献	職場の雰囲気	ゆとり	さまざまな経験	仕事と家事の両立
全体	4.0	4.2	3.9	3.6	3.5	3.6	3.9	3.3	3.3	4.0	4.2	3.9	3.9	3.8
男性	4.1	4.3	3.9	3.9	3.6	3.6	3.9	3.3	3.4	4.0	4.1	3.7	3.9	3.4
女性	4.0	4.0	4.0	3.4	3.4	3.5	4.0	3.4	3.2	4.0	4.4	4.1	3.9	4.3

全体では、職場の雰囲気、知識の活用、仕事のやり方の平均値が4点を超えている。また社会的貢献も3.98と高い。逆に、チームでの仕事(3.26)、将来の見通し(3.34)、社会的評価・ステータス(3.48)は低い。

性別による違いに注目すると、男性の平均値が女性よりも高い項目として、チャレンジ、チームでの仕事、社会的評価・ステータスなどがある。逆に女性の平均値が高い項目として、仕事と家庭の両立、時間的ゆとり、職場の雰囲気がある。特に仕事と家庭の両立につ

いては、男性が3.42であるのに対して、女性は4.32と大きな差がある。こうした傾向から、男性は、仕事のプロセスや結果を重視するのに対して、女性は仕事の環境を重視する傾向があることがわかる。

(2) 仕事で充足している側面

以下では、それぞれの項目について、「とても充足」を5点、「やや充足」を4点、「どちらでもない」を3点、「あまり充足されず」を2点、「全く充足されず」を1点としたときの平均点の値によって傾向を見ていくことにする。

全体では、仕事のやり方(3.84)、知識の活用(3.82)、職場の雰囲気(3.70)の平均点が高い。逆に、将来の見通し(2.87)、高い収入(2.93)の平均点が低い。

性別による違いに注目すると、男性の平均値が高い項目として、チャレンジ(+0.33)、高い収入(+0.30)、雇用の保障(+0.27)、将来の見通し(+0.26)が挙げられる。逆に女性の平均値が高い項目として、仕事と家事の両立(+0.41)、時間的ゆとり(+0.32)が挙げられる。

表 9.3 仕事で充足している側面

	仕事のやり方	知識の活用	学習継続	チャレンジ	社会的評価	高い収入	雇用の保障	将来の見通し	チームでの仕事	社会的貢献	職場の雰囲気	ゆとり	さまざまな経験	仕事と家事の両立
全体	3.8	3.8	3.7	3.4	3.4	2.9	3.5	2.9	3.4	3.7	3.7	3.5	3.6	3.5
男性	3.9	3.9	3.7	3.5	3.5	3.0	3.6	3.0	3.4	3.7	3.6	3.4	3.6	3.3
女性	3.8	3.7	3.7	3.2	3.4	2.7	3.4	2.7	3.3	3.7	3.8	3.7	3.6	3.7

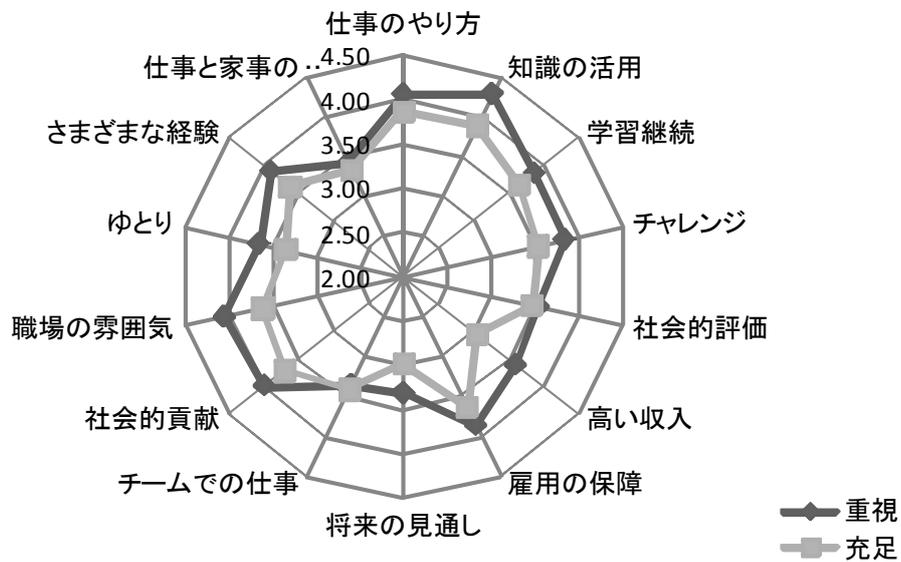


図 9.1 仕事で重視している点と充足している点 (男性)

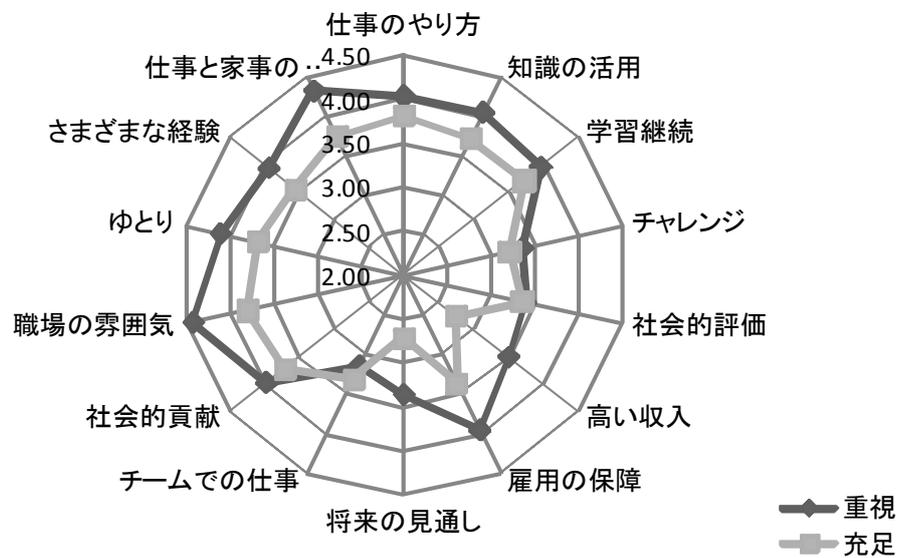


図 9.2 仕事で重視している点と充足している点 (女性)

9.3 能力、技能の獲得時期

① 商品や事業についての知識
② 経理・法律等の事務的な知識
③ 人文科学の理論的な知識
④ 幅広い教養
⑤ データ処理、事務処理の仕方
⑥ 英語などの語学力
⑦ プレゼンテーション力
⑧ 企画・アイデアなどの創造力
⑨ 情報収集力
⑩ コミュニケーション能力

(1) 商品や事業についての知識

全体の傾向として、最も知識を獲得した時期は、職場での経験であり、81.5%である。あとは、研修の時期 15.5%であり、これから身につけたいという者も 7.6%もいる。

表 9.4 能力、技能の獲得時期／商品や事業についての知識

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	1.7	3.9	81.5	15.5	6.1	7.6
男性	2.2	3.8	88.2	14.7	3.0	4.1
女性	1.1	4.0	73.6	16.5	9.8	11.8
60～69 年卒	3.5	4.2	82.6	20.8	6.3	1.0
70～79 年卒	2.8	3.3	81.5	16.3	9.8	4.3
80～89 年卒	0.7	3.3	84.7	14.8	7.2	5.2
90～99 年卒	1.0	2.8	85.8	12.4	4.1	8.6
2000～09 年卒	0.8	6.5	71.6	14.6	2.2	19.1

性別では、男性は女性よりも職場での経験によって知識を獲得する者が 14.6 ポイント高い。女性は、これから身につけたいと回答する者が男性よりも 7.7 ポイント多い。

年代別では、職場での経験によって知識を得た者は、60 年代卒から 90 年代卒までは 80%を超えているが、2000 年代卒は 71.6%にとどまる。これは、2000 年代卒はまだ職場での経験が少ないことによると考えられる。それはこれから身につけたいと回答する者が、2000 年代卒に 19.1%と高い比率であるにもあらわれている。また研修は、60 年代卒が 20.8%と高

かったが、その後は12～17%程度となっている。

(2) 経理・法律等の事務的な知識

全体で最も多い時期は、職場での経験であり、63.6%である。続いて、これから身につけたい(18.5%)、研修(15.1%)となっている。

性別で見ると、男性は女性よりも職場での経験によって知識を獲得する者が18.4ポイント高い。女性は、これから身につけたいと回答する者が、男性よりも13.7ポイント高い。つまり、経理・法律等の事務的な知識を女性は男性よりも、仕事の中で獲得する機会が少ないことを示している。

年代別で見ると、職場での経験、研修、その他において、若い世代での比率が低くなっている。特に職場での経験は、60年代卒が74.0%であるのに対して、2000年代卒は43.3%と少ない。また研修は、60年代卒、70年代卒が19%以上であるのに対して、2000年代卒は11.4%と低い。つまり経理・法律等の事務的な知識は、職場での長い経験の中で獲得される性質の知識であることがわかる。

表 9.5 能力、技能の獲得時期／経理・法律等の事務的な知識

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	0.4	4.9	63.6	15.1	11.8	18.5
男性	0.3	4.8	72.1	17.0	9.1	12.2
女性	0.4	4.9	53.7	13.0	14.9	25.9
60～69年卒	0.0	6.6	74.0	19.8	12.8	4.4
70～79年卒	1.1	5.0	69.3	19.1	14.3	7.9
80～89年卒	0.0	3.7	68.7	13.1	13.6	13.3
90～99年卒	0.3	3.6	62.5	13.1	10.8	22.4
2000～09年卒	0.3	6.1	43.3	11.4	6.7	45.0

(3) 人文科学の理論的な知識

全体で最も多い時期は、大学時代であり58.2%となっている。続いて職場での経験(17.1%)、これから身につけたい(16.9%)となっている。

性別による違いを見ると、男性は職場での経験によって知識を得る者が、女性よりも12.3ポイント高く、職場が重要な場であることがわかる。一方女性はこれから身につけたいという者が男性よりも9.0ポイント高く、知識を得る機会が男性よりも少ないことがわかる。ただし、大学時代については女性のほうが4.0ポイント高い。

年代別で見ると、大学時代という回答は70年代卒が最も高く、90年代卒、2000年代卒はやや低い。また職場での経験は、経験の長さから、年長の世代ほど比率が高く、60年代

卒は 27.3%であるのに対して、2000 年代卒は 10.6%となっている。またこれから身につけたいについても、60 年代卒は 6.0%であるのに対して、2000 年代卒は 32.3%にのぼる。

表 9.6 能力、技能の獲得時期／人文科学の理論的な知識

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	6.2	58.2	17.1	4.9	11.7	16.9
男性	6.3	56.3	22.8	5.1	11.7	12.7
女性	6.0	60.4	10.5	4.7	11.7	21.7
60～69 年卒	6.7	57.3	27.3	9.0	13.5	6.0
70～79 年卒	5.5	65.9	16.6	5.7	14.7	9.4
80～89 年卒	6.9	58.0	16.9	3.8	13.6	16.7
90～99 年卒	7.1	54.5	16.5	3.1	10.2	19.9
2000～09 年卒	4.9	53.4	10.6	4.3	5.7	32.3

(4) 幅広い教養

全体では、大学時代が最も多く、52.1%となっている。続いて、職場での経験が 35.7%、大学以前が 16.3%となっている。大学が、幅広い教養を獲得する場であることがわかる。

表 9.7 能力、技能の獲得時期／幅広い教養

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	16.3	52.1	35.7	7.5	16.0	14.8
男性	15.2	48.6	42.9	7.5	15.0	10.7
女性	17.5	56.1	27.5	7.6	17.1	19.5
60～69 年卒	17.7	52.4	44.2	11.2	15.3	6.5
70～79 年卒	14.6	55.6	37.2	8.2	19.5	9.9
80～89 年卒	15.2	51.0	38.3	8.1	19.9	14.8
90～99 年卒	17.2	53.8	32.6	4.4	14.4	16.7
2000～09 年卒	17.9	47.0	26.6	6.3	8.5	26.4

性別による違いを見ると、男性は、職場での経験が 42.9%と、女性の 27.5%よりも 15.4 ポイントも高い。一方女性は、これから身につけたいが 19.5%であり、男性の 10.7%よりも 8.8 ポイント高くなっている。また大学時代についても女性は男性よりも 7.6 ポイント高くなっている。男性にとっては、大学と職場での経験が教養を身につける重要な場であるが、女性にとっては、大学の役割がより大きいことがわかる。

年代別で見ると、職場での経験は、経験の長さから、年長の世代の比率が高く、若い世代の比率は低い。それと対応するように、これから身につけたいと回答した者の比率は、60年代卒では6.5%であったのに対して、2000年代卒は26.4%である。大学時代については、60年代卒から90年代卒までは5割を超えているが、2000年代卒は47.0%に微減している。

(5) データ処理、事務処理の仕方

全体では、職場での経験が最も多く、78.9%である。続いて、研修が11.0%、大学時代が8.6%となっている。データ処理や事務処理といった実際の職務に直接関連する知識、技能は、会社での習得が大半であることがわかる。

性別による違いを見ると、男性は、職場での経験が女性よりも8.8ポイント高く、83.5%となっている。一方女性はこれから身につけたいが5.9ポイント、大学時代が5.5ポイント男性よりも高くなっている。

年代別で見ると、大学時代が2000年代卒で20.0%と、他の年代に比べて2倍以上の比率となっている。職場での経験は、60年代卒から90年代卒までは、8割前後にのぼっているが、2000年代卒には70.0%と、減少している。またこれから身につけたいと回答した者の比率は、若い世代ほど高い。

表 9.8 能力、技能の獲得時期／データ処理、事務処理の仕方

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	0.8	8.6	78.9	11.0	7.1	8.5
男性	0.6	6.1	83.5	12.3	5.9	5.8
女性	1.1	11.6	73.6	9.4	8.6	11.7
60～69年卒	0.4	4.3	80.4	15.3	7.1	5.3
70～79年卒	0.9	3.9	78.9	15.7	11.8	5.4
80～89年卒	0.2	6.1	84.2	10.6	6.5	6.9
90～99年卒	0.5	9.8	79.6	8.5	5.3	9.8
2000～09年卒	2.2	20.2	70.0	4.5	3.9	15.7

(6) 英語などの語力

全体では、大学時代が35.0%、大学以前が34.2%となっている。さらにこれから身につけたいと考えている者も27.2%いる。職場での経験や研修によって語学力を身につける比率は低い。

性別の差に注目すると、大学以前については女性のほうが10.6ポイント高い。一方職場での経験については、男性のほうが7.3ポイント高い。女性は学校での勉強によって身につける者が多く、男性は職場での経験によって身につけていく者も少なくないことがわかる。

年代別では、大学時代については、年長の世代ほど比率が高く（60年代卒が44.3%であるのに対して、2000年代卒は30.1%）、大学以前については若い世代ほど比率が高くなっている（60年代卒が24.2%であるのに対して、2000年代卒は42.0%）。職場での経験については、年長の世代ほど比率が高く、60年代卒が14.3%であるのに対して2000年代卒は3.3%に過ぎない。さらにこれから身につけたいと考えている者は、60年代卒が15.0%であるのに対して、2000年代卒は37.3%と高い。

表 9.9 能力、技能の獲得時期／英語などの語学力

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	34.2	35.0	10.3	3.9	14.1	27.2
男性	29.2	36.0	13.7	5.1	11.6	25.9
女性	39.8	33.8	6.4	2.5	16.8	28.6
60～69年卒	24.2	44.3	14.3	11.0	18.3	15.0
70～79年卒	30.2	39.5	11.7	3.5	15.1	24.2
80～89年卒	36.7	33.4	13.5	3.7	15.9	26.0
90～99年卒	35.8	29.4	8.6	2.5	13.2	31.2
2000～09年卒	42.0	30.1	3.3	0.8	8.0	37.3

(7) プレゼンテーション力

全体では、職場での経験が60.1%で最も高い。続いて、これから身につけたいと回答した者が19.2%、大学時代と回答した者が15.3%となっている。

表 9.10 能力、技能の獲得時期／プレゼンテーション力

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	2.2	15.3	60.1	10.8	8.6	19.2
男性	1.9	12.7	74.9	12.9	5.8	10.3
女性	2.6	18.3	42.5	8.3	12.0	29.8
60～69年卒	1.1	11.8	69.5	18.6	9.0	5.7
70～79年卒	1.8	12.8	67.5	10.2	11.9	12.8
80～89年卒	2.4	15.4	64.6	10.4	10.0	15.7
90～99年卒	1.6	12.1	58.7	9.0	6.5	24.8
2000～09年卒	4.2	24.4	39.2	7.8	4.8	36.1

性別による違いに注目すると、職場での経験については、男性は74.9%と7割以上である

のに対して、女性は42.5%と5割に満たない。一方、これまで身につけておらず、これから身につけたいと考えている者は、女性が29.8%であるのに対して、男性は10.3%に過ぎず、女性は男性の約3倍にもものぼる。つまり、職場においてプレゼンテーション力を身につける機会を女性はあまり持っていないということである。

年代別では、職場での経験によって身につけた者の比率は、若い世代ほど低く、60年代卒と2000年代卒の差は30ポイント以上になる。一方これから身につけたいと考えている者の比率は、60年代卒が5.7%であったのに対して、2000年代卒は36.1%と非常に多い。また大学時代については、2000年代卒が24.4%と他の年代に比べて、2倍近く高い。大学においてもプレゼンテーション能力の必要から、教育されていることのあらわれと考えることができる。

(8) 企画・アイデアなどの創造力

全体では、職場での経験が59.9%で最も高い。後は、これから身につけたいという回答が18.0%、大学時代が14.9%となっている。

性別による違いに注目すると、職場での経験については、男性は72.9%であるのに対して、女性は44.4%と半数にも満たない。職場で女性が企画・アイデアなどの創造力を身につける機会が少ないことをあらわしている。こうした傾向に対応するように、これから身につけたいと回答している者の比率は、女性が男性よりも16.7ポイントも高く27.1%となっている。

年代別では、職場での経験については、年長の世代ほど比率が高く、60年代卒は76.2%であるのに対して、2000年代卒は37.7%である。大学時代については、2000年代卒が20.7%と他の年代よりも高い。一方、これから身につけたいと考えている者の比率は、若い世代ほど高く、90年代卒は23.3%、2000年代卒は37.4%と非常に高い。

表 9.11 能力、技能の獲得時期／企画・アイデアなどの創造力

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	7.9	14.9	59.9	7.0	11.5	18.0
男性	6.7	14.7	72.9	8.8	7.9	10.4
女性	9.2	15.2	44.4	5.0	15.8	27.1
60～69年卒	4.6	13.5	76.2	13.8	8.5	3.2
70～79年卒	6.5	13.7	66.4	8.7	15.2	10.4
80～89年卒	7.7	14.9	64.7	4.8	13.2	15.1
90～99年卒	9.6	12.1	55.3	6.2	10.6	23.3
2000～09年卒	10.6	20.7	37.7	3.4	7.8	37.4

(9) 情報収集力

全体では、職場での経験という回答が、65.7%で最も高い。続いて、大学時代が22.5%、その他が12.6%となっている。

性別による違いに注目すると、職場での経験については、男性が79.2%であるのに対して女性は49.7%と29.5ポイント低い。逆に、大学、その他、これから身につけたいと回答する者の比率は、10ポイント前後女性のほうが高くなっている。

年代別で見ると、職場での経験は60年代卒が81.1%であるのに対して、2000年代卒は44.3%と1/2程度と、かなり低くなっている。また大学時代については、60年代卒が14.7%であるのに対して2000年代卒は38.9%と高く、情報収集に関する技術を大学で学んでいる者が多くなってきていることがわかる。

表 9.12 能力、技能の獲得時期／情報収集力

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	5.0	22.5	65.7	5.5	12.6	10.3
男性	4.5	18.1	79.2	6.4	7.8	6.2
女性	5.5	27.7	49.7	4.4	18.3	15.2
60～69年卒	2.8	14.7	81.1	11.2	12.3	3.9
70～79年卒	4.1	17.3	68.0	6.0	15.8	8.4
80～89年卒	4.7	21.3	70.1	4.5	13.5	9.0
90～99年卒	4.3	20.8	66.0	4.6	12.9	12.2
2000～09年卒	9.0	38.9	44.3	2.5	7.3	17.6

(10) コミュニケーション力

全体では、職場での経験が53.7%と最も高く、大学が39.5%、大学以前が21.5%となっている。

性別による違いに注目すると、職場での経験は男性のほうが女性よりも10.7ポイント高い。逆に大学以前、その他については約6ポイント女性のほうが高くなっている。

年代別で見ると、職場での経験の比率は、若い世代ほど低い。60年代卒には63.3%であるのに対して、2000年代卒には40.5%にまで減少している。逆に大学時代に身につけたと回答する者の比率は、60年代卒には32.3%であったのが、2000年代卒には45.4%に増加している。また大学以前についても、60年代卒は15.6%であったのが、2000年代卒には28.8%に増加している。

表 9.13 能力、技能の獲得時期／コミュニケーション力

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
全 体	21.5	39.5	53.7	6.5	10.3	6.5
男性	18.5	38.9	58.7	7.6	7.5	4.9
女性	24.9	40.1	48.0	5.2	13.5	8.3
60～69 年卒	15.6	32.3	63.3	12.6	8.8	4.1
70～79 年卒	17.8	35.7	57.5	6.6	13.3	5.6
80～89 年卒	19.3	42.0	55.6	4.7	12.3	5.3
90～99 年卒	26.1	40.9	51.9	5.5	9.3	7.0
2000～09 年卒	28.8	45.4	40.5	4.9	6.0	10.6

(11) 10 項目の比較

10 項目の仕事に必要な能力・技能について、獲得した時期の違いをしてみることにした。

表 9.14 能力、技能の獲得時期／10 項目の比較

	大学以前	大学	職場での 経験	研修	その他	これから身 につけたい
事務的知識	0.4	4.9	63.6	15.1	11.8	18.5
事務処理能力	0.8	8.6	78.9	11.0	7.1	8.5
商品・事業の知識	1.7	3.9	81.5	15.5	6.1	7.6
プレゼン力	2.2	15.3	60.1	10.8	8.6	19.2
情報収集力	5.0	22.5	65.7	5.5	12.6	10.3
理論的知識	6.2	58.2	17.1	4.9	11.7	16.9
創造力	7.9	14.9	59.9	7.0	11.5	18.0
幅広い教養	16.3	52.1	35.7	7.5	16.0	14.8
コミュニケーション力	21.5	39.5	53.7	6.5	10.3	6.5
語学力	34.2	35.0	10.3	3.9	14.1	27.2

大学以前については、語学力（34.2%）、コミュニケーション能力（21.5%）、幅広い教養（16.3%）の比率がやや高い。大学時代については、理論的知識（58.2%）、幅広い教養（52.1%）が半数を超えており、語学力（35.0%）、コミュニケーション力（39.5%）の比率も高い。次に、職場での経験によって獲得する能力は多い。仕事に直結する商品・事業についての知識（81.5%）、事務処理能力（78.9%）が最も高く、情報収集力（65.7%）、経理・法律等の事務的知識（63.6%）、プレゼンテーション力（60.1%）も 6 割を越えている。一方で、語学力

(10.3%)、人文科学の理論的知識(17.1%)については職場では獲得しにくい能力、知識であることがわかる。次に研修については、商品・事業についての知識(15.5%)、経理・法律等の事務的知識(15.1%)の比率がやや高い。最後にこれから身につけたいと考えている能力、知識として最も高いのは語学力(27.2%)、続いてプレゼンテーション力(19.2%)、経理・法律等の事務的な知識(18.5%)、創造力(18.0%)となっている。

9.4 重要な能力

10の能力、知識のうち、仕事をおこなう上で重要な能力をすべて挙げてもらった。

表 9.15 重要な能力

	商品・事業の知識	事務的知識	理論的知識	幅広い教養	処理技術	語学力	プレゼン	創造力	情報収集力	コミュニケーション能力
全体	41.5	32.7	14.5	53.5	33.5	23.3	43.1	45.4	51.1	86.3
男性	47.6	38.5	15.2	55.9	30.4	24.4	50.1	52.5	56.4	85.2
女性	33.5	25.3	13.6	50.2	37.5	21.9	34.0	36.1	44.1	87.7
60～69年卒	51.9	45.2	26.7	65.9	35.6	26.7	45.9	52.6	56.3	79.3
70～79年卒	43.4	38.6	17.1	57.7	33.4	22.0	36.0	46.9	48.6	82.9
80～89年卒	43.8	32.5	13.8	53.5	34.5	23.5	43.3	47.8	54.8	87.3
90～99年卒	37.2	29.8	14.6	49.8	31.4	26.9	48.2	46.0	52.4	88.3
2000～09年卒	36.2	24.0	7.4	46.8	33.3	19.6	44.6	37.2	45.5	90.1

全体では、最も多くの回答者から必要であると考えられている能力は、コミュニケーション能力であり、86.3%の回答者が重要であると回答している。続いて、幅広い教養(53.5%)、情報収集力(51.1%)、創造力(45.4%)となっている。逆に理論的知識(14.4%)、語学力(23.2%)、事務的知識(32.7%)については重要だと感じている人は少ない。

性別の違いに注目すると、男性はコミュニケーション能力、情報収集力、幅広い教養、創造力の順で比率が高くなっている。一方女性は、コミュニケーション能力、幅広い知識、情報収集力、データ処理・事務処理力の順となっている。ここから男性と女性にとって会社で必要とされる能力、重要とされる能力が異なることがわかる。男性は、情報収集し、企画・アイデアを作り出す創造力が必要とされるのに対して、女性はデータ処理や事務処理などの補助的な能力が、男性に比べて必要とされている。

年代別では、コミュニケーション能力はどの年代でも高比率であるものの、60年代卒は

79.3%であったのに対して、2000年代卒には90.1%になっている。逆に幅広い教養は、60年代卒が65.9%であるのに対して2000年代卒は46.8%と低くなっている。他にも、商品・事業についての知識、経理・法律等の事務的知識、人文科学の理論的知識、企画・アイデアなどの創造力についても若い世代ほど比率が低くなっている。

年代の傾向は、年長の世代になるほど、どの能力も重要であると回答する傾向があるのに対して、若い世代はコミュニケーション能力の偏る傾向がある。

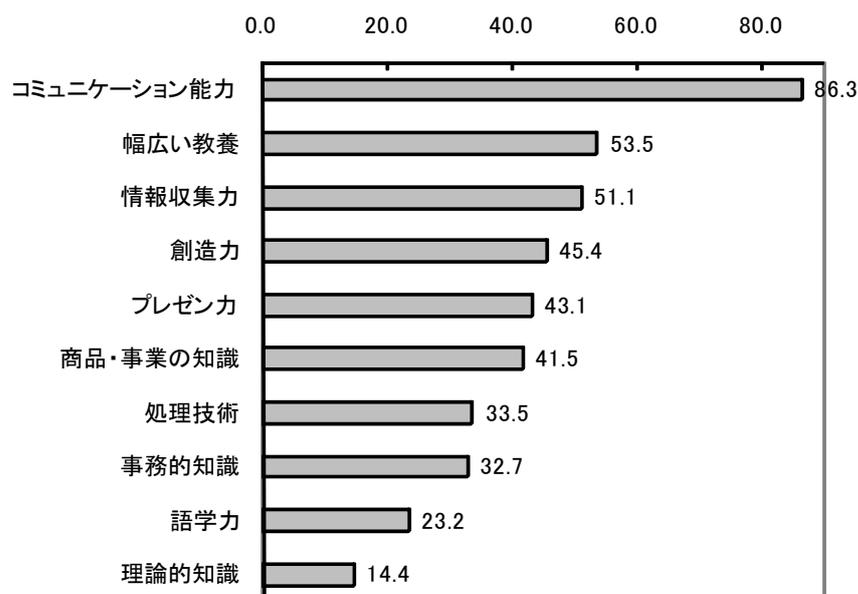


図 9.3 仕事に必要な能力

10. 生活

10.1 生活満足感

全体では、「非常に満足している」が13.0%、「満足している」が65.8%であり、合わせると、78.8%が満足していることになる。「どちらでもない」が3.0%、「やや不満がある」が14.2%、「不満である」が4.0%となっている。

性別では、ほとんど差がない。

年代別では、60年代卒の満足度が最も高く、「非常に満足」(17.4%)、「満足」(69.9%)合わせると、87.3%である。70年代卒以降は、あまり大きな違いはなく、合わせた比率は76～79%程度である。

表 10.1 生活満足感

	非常に満足	満足	やや不満	不満	どちらでもない
全 体	13.0	65.8	14.2	4.0	3.0
男性	12.8	65.9	13.7	4.6	3.1
女性	13.3	65.7	14.7	3.4	2.9
60～69年卒	17.4	69.9	9.5	1.3	1.9
70～79年卒	9.6	67.9	15.6	3.1	3.7
80～89年卒	12.1	63.7	14.1	6.1	3.9
90～99年卒	16.3	62.0	14.1	5.1	2.4
2000～09年卒	11.5	66.2	16.4	3.5	2.4

10.2 組織活動

現在加入している組織について、以下の12のカテゴリーから選んでもらった。

1 自治会・町内会	5 労働組合	10 ボランティアの団体やグループ
2 婦人会、青年団、消防団、老人会、子供会などの地域組織	6 政党	11 宗教団体
3 PTA	7 政治家の後援会	12 趣味やスポーツの集まり
4 商工会、商店組合、農協・漁協などの職業団体	8 地域生協	13 その他
	9 市民運動団体やNGO	14 どれも加入していない

表 10.2 組織活動

	自治会	地域組織	PTA	職業団体	労働組合	政党	政治家の後援会	地域生協	市民運動団体 やNGO	ボランティア	宗教団体	趣味やスポーツ の集まり	その他	どれも加入して いない
全 体	41.4	6.8	10.7	6.7	10.6	0.3	1.7	13.8	3.7	12.7	5.3	39.5	3.4	23.9
男性	40.3	5.4	6.0	10.5	12.0	0.3	2.5	3.5	3.6	12.0	4.2	35.6	3.6	26.9
女性	42.5	8.3	16.1	2.5	9.1	0.4	0.8	25.2	3.8	13.5	6.4	43.8	3.2	20.5
60～69年卒	56.4	10.3	0.3	11.5	0.3	0.3	4.2	8.0	7.4	24.0	9.9	59.3	5.4	11.2
70～79年卒	52.5	5.7	3.8	10.1	3.4	0.6	1.6	18.6	4.2	17.8	6.1	43.2	3.8	18.2
80～89年卒	51.0	8.2	26.2	6.7	10.5	0.6	1.9	18.0	3.3	11.7	4.8	34.9	3.8	20.9
90～99年卒	31.3	8.2	18.4	3.2	16.9	0.0	1.2	13.2	2.2	5.2	4.0	32.3	2.7	28.0
2000～09年卒	11.1	1.9	0.6	1.7	22.8	0.0	0.0	7.0	1.9	5.3	1.9	31.2	1.4	42.1

全体では、自治会が最も多く 41.5%の回答者が加入している。続いて、趣味やスポーツの集まり（39.6%）、地域生協（13.8%）、ボランティア団体（12.7%）、PTA（10.8%）、労働組合（10.6%）となっている。まだどれも加入していない人の比率は、23.9%である。

性別で見ると、どれにも加入していない人の比率が男性が 26.9%であるのに対して、女性は 20.5%と男性の比率が高くなっている。男性の比率の高い組織は、職業団体（+8.0 ポイント）、労働組合（+2.9 ポイント）であり、仕事に係わる組織である。それに対して女性の比率の高い組織は、地域生協（+21.7 ポイント）、PTA（+10.1 ポイント）、趣味やスポーツの集まり（+8.1 ポイント）、地域組織（+2.9 ポイント）、自治会（+2.2 ポイント）、宗教団体（+2.1 ポイント）などである。

年代別で見ると、どの組織にも加入していない者の比率は、若い世代ほど多く、60 年代卒では 11.2%に過ぎないのに、2000 年代卒では 42.1%にのぼる。ただ若い世代ほど加入率の高い組織もあり、それは労働組合である。逆に若い世代ほど加入率の低い組織は、自治会、地域組織、職業団体、政治家の後援会、市民運動、ボランティア団体、宗教団体、趣味やスポーツの集まりである。また PTA については、70 年代卒と 80 年代卒、地域生協については 70 年代卒と 80 年代卒の比率が高くなっている。

10.3 友人関係

大学在学中と現在の関学出身の友人の数について、尋ねた。

まず、大学在学中の友人数について見ていく。全体で見ると、10 人以下が 32.2%で最も多く、続いて 11～20 人の 28.5%、21～30 人の 18.1%、31～50 人の 13.7%、51～100 人の 6.5%、101 人以上が 1.0%となっている。

性別では、男性は女性よりも、10人以下において5.0ポイント比率が高い。20～50人については、女性のほうが比率が高い。

年代で見ると、10人以下の比率は、70年代卒に43.3%と最も高く、その後減少している。11～20人も若い世代ほど微減している。逆に、21～100人の友人を持つ者の比率は、60年代卒には31.2%であったのが、2000年代卒には53.8%にまで増加している。

表 10.3 大学在学中の友人数

	10人以下	20人以下	30人以下	50人以下	100人以下	101人以上
全 体	32.2	28.5	18.1	13.7	6.5	1.0
男性	34.5	27.8	17.1	12.7	6.3	1.5
女性	29.4	29.3	19.2	14.9	6.8	0.3
60～69年卒	36.4	30.8	16.2	12.0	2.9	1.6
70～79年卒	43.3	28.0	14.5	9.3	4.2	0.8
80～89年卒	31.7	29.4	18.7	14.3	5.7	0.4
90～99年卒	25.8	30.1	22.8	10.4	9.1	1.5
2000～09年卒	20.9	24.5	18.8	23.9	11.1	0.8

表 10.4 現在の友人数

	0人	5人以下	10人以下	20人以下	21人以上
全 体	4.8	46.1	29.6	12.9	6.6
男性	6.3	47.5	25.9	12.7	7.5
女性	3.0	44.4	34.0	13.1	5.5
60～69年卒	4.5	42.4	30.9	12.9	9.3
70～79年卒	4.0	52.8	26.7	10.1	6.5
80～89年卒	7.1	50.9	27.4	9.8	4.8
90～99年卒	6.0	45.9	33.3	11.5	3.0
2000～09年卒	1.9	33.8	31.4	22.4	10.5

次に、現在の友人数について見ていく。

全体で見ると、1～5人が46.1%で最も多く、続いて6～10人が29.6%、11～20人が12.9%、21人以上が6.6%である。まったく付き合いがない(0人)も4.8%いる。全体の平均値は9.7人、中央値は5.0人、最頻値は10人であった。

性別で見ると、男性の比率が女性の比率を上回っているのは、0人、1～5人、21人以上である。逆に女性の比率が高いのは、6～20人の場合である。男性は、女性に比べて友人数にばらつきがあることがわかる。

次に年代別で見ると、0人は80年代卒に最も多く7.1%であるが、2000年代卒には1.9%

と非常に少ない。また 1～5 人は、70 年代卒に 52.8%と最も高い比率であるが、その後減少し、2000 年代卒には 33.8%にまで減少する。逆に、11～20 人、21 人以上については、2000 年代卒が最も比率が高くなっている。これは、一つには若い世代ほどそもそも学生時代の友人数が多いということと、もう一つは若い世代ほど大学を卒業してからの年月が短いため、大学時代の友人とのつながりが残っているということであると考えられる。

10.4 交際範囲

社会学部の卒業生の方々がどのような職業の方と知り合いであるか（どのような交際範囲を持っているのか）を知るために、52 の職業について知り合いがいるかどうかを尋ねた。ここでの知り合いとは、「個人的なお願いができるくらいの関係にある」という意味である。

全体で最も高い比率だったのは、医師の 44.6%であった。続いて中小企業の社長 (37.8%)、小学校教諭 (28.9%)、看護師 (27.4%)、薬剤師 (25.9%) となっている。逆に清掃夫 (2.2%)、守衛 (2.1%)、裁判官 (2.0%)、大企業の機械組立工 (2.0%)、電車運転手 (1.6%)、鉄道工夫 (0.3%) は比率が低い。

性別の違いを見ると、女性よりも男性の比率が高い職業として、中小企業の課長 (+18.5 ポイント)、大企業の課長 (+13.6 ポイント)、セールスマン (+11.2 ポイント)、大工 (+8.1 ポイント)、寺の住職 (+8.0 ポイント) が挙げられる。逆に女性の比率が高い職業として、看護婦 (+19.7 ポイント)、薬剤師 (+15.4 ポイント)、保育士 (+13.7 ポイント)、音楽家 (+11.0 ポイント)、事務員 (+8.8 ポイント)、小学校教諭 (+7.8 ポイント) が挙げられる。

年代別に見ると、若い世代ほど比率が低い職業として、医師、中小企業の課長、事務員、寺の住職、建築士、大工、大企業の社長、音楽家、電気工事人、卸売店主、商店の店主、電気工事人、自動車修理工などである。逆に若い世代ほど比率が高い職業としては、看護婦、事務員、警察官、客室乗務員、警察官、保育士などがある。

さらに、70 年代卒、80 年代卒に比率が高くなるが、90 年代卒には比率が低くなり、2000 年代卒に再び比率が上昇するようなパターンの職業として、小学校教諭、銀行員、市役所職員、薬剤師がある。

表 10.5 交際範囲

	全 体	男性	女性	60～69 年卒	70～79 年卒	80～89 年卒	90～99 年卒	2000～ 09年卒
医師	44.6	27.9	37.8	59.5	50.2	45.8	40.2	29.3
中小企業の課長	37.8	14.0	21.3	48.5	46.5	41.8	32.7	19.2
小学校教諭	28.9	12.3	18.3	19.1	31.0	30.1	22.5	39.1
看護師	27.4	8.6	13.0	18.7	23.7	25.1	27.7	41.1
薬剤師	25.9	16.1	20.3	22.9	28.4	23.9	24.0	29.6
市役所職員	25.3	3.8	7.7	21.8	27.9	26.9	21.7	26.3
銀行員	24.5	5.4	9.2	21.0	26.8	27.4	19.9	25.4
事務員	23.7	4.9	8.7	13.7	20.9	24.4	28.0	29.6
建築士	21.5	11.3	15.1	26.3	26.5	18.9	21.7	14.2
大企業の課長	21.3	13.2	16.9	21.4	22.3	26.6	21.1	13.9
寺の住職	20.3	11.9	15.5	38.2	26.3	18.7	11.8	9.8
保育士	19.6	1.9	5.2	9.5	20.4	16.7	17.9	31.4
大学教授	18.8	14.7	17.8	34.4	23.0	17.4	11.8	10.4
セールスマン	18.3	22.0	24.5	13.4	18.8	21.9	19.1	16.6
音楽家	18.1	6.5	8.9	22.1	18.8	17.9	17.6	14.8
農家	17.8	13.5	15.6	25.2	20.2	19.9	11.6	13.0
理容師	17.2	3.7	5.5	18.7	16.4	18.7	15.9	16.6
警察官	16.9	23.5	25.3	13.7	16.4	16.7	16.8	20.1
情報処理技術者	16.0	1.7	3.4	13.7	14.1	17.9	20.2	13.6
公認会計士	16.0	14.4	16.0	15.6	20.4	13.9	17.3	11.8
保険の勧誘員	15.6	2.7	4.2	14.1	19.0	15.7	14.7	13.3
商店の店主	15.5	3.7	5.1	23.7	20.7	18.7	9.2	5.3
小売店主	15.1	2.1	3.3	19.1	21.1	20.1	7.5	5.9
銀行の窓口係	14.7	14.9	16.0	11.8	12.0	14.2	12.4	23.1
大工	13.0	9.1	10.3	16.8	17.6	13.4	10.4	6.5
コック	10.3	0.9	2.0	9.5	9.4	9.5	11.6	11.5
自動車修理工	9.2	3.3	4.3	15.3	6.8	10.4	7.5	7.7
電気工事人	8.9	1.7	2.6	11.5	12.0	9.0	6.9	4.7
卸売店主	8.7	20.6	21.5	12.6	12.7	9.0	6.1	3.0
大会社の社長	7.7	16.3	17.2	13.4	10.8	7.5	5.2	2.4
客室乗務員	6.4	1.2	2.1	2.7	5.4	5.5	8.4	9.8
現場監督	5.5	2.1	2.9	5.3	7.5	4.2	5.8	4.4
国会議員	5.2	3.9	4.5	8.8	5.4	6.7	3.5	2.1

高級官僚	5.1	1.7	2.2	4.6	4.5	6.0	6.9	3.3
機械設計技術者	4.5	2.8	3.0	6.5	5.4	3.7	3.5	3.8
服飾デザイナー	4.4	0.4	0.3	5.7	3.5	3.0	4.3	6.2
郵便配達人	4.3	3.9	3.7	4.2	5.9	3.7	4.0	3.6
プロスポーツ 選手	4.2	19.1	18.8	4.2	3.3	5.2	4.0	4.4
ウェイトレス	4.0	2.1	1.6	1.5	1.6	4.5	5.2	7.1
パイロット	3.9	4.4	3.9	3.8	4.0	3.2	3.8	5.0
科学者	3.7	2.6	2.0	6.1	2.8	4.2	4.0	2.1
印刷工	3.4	5.1	4.4	3.8	3.3	3.7	3.2	3.0
食品製造工	3.3	5.2	4.0	3.8	3.1	3.0	4.6	2.4
鉄道の駅員	3.0	46.2	44.6	1.5	1.4	3.0	1.2	8.3
家具職人	2.9	16.3	14.7	4.2	3.8	1.5	2.6	2.7
バス運転手	2.6	8.4	6.4	1.9	2.3	4.7	2.0	1.8
清掃夫	2.2	33.1	28.9	3.4	2.3	2.2	1.4	1.8
守衛	2.1	28.4	23.7	3.8	2.8	1.7	1.4	0.9
裁判官	2.0	24.0	18.1	1.5	2.6	1.5	2.6	1.8
大企業の 機会組立工	2.0	26.9	19.6	1.9	1.4	2.2	2.3	2.1
電車運転手	1.6	34.2	25.9	1.1	1.2	1.5	0.9	3.6
鉄道工夫	0.3	38.0	27.4	0.4	0.0	0.7	0.0	0.6

11. 大学について

11.1 大学への思い

(1) 現在でも関学に強い結びつきを感じている

全体では、「とてもあてはまる」が 19.1%、「まああてはまる」が 42.2%であり、肯定的な意見を合わせると、61.3%となる。逆に「あまりあてはまらない」は 12.2%、「あてはまらない」は 3.5%であり、否定的な意見を合わせると、15.7%である。肯定的な意見が否定的な意見の約 4 倍に達している。

性別の違いに注目すると、若干男性は「とてもあてはまる」が多く、「あまりあてはまらない」が少ないが、大きな違いはない。

年代別では、「とてもあてはまる」は 60 年代卒で多く、「あまりあてはまらない」は 90 年代卒、「あてはまらない」は 2000 年代卒でやや多くなっている。

表 11.1 大学への思い／現在でも関学に強い結びつきを感じている

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
全 体	19.1	42.2	23.1	12.2	3.5
男性	21.1	43.2	21.5	10.3	3.8
女性	16.8	41.0	24.9	14.3	3.1
60～69 年卒	23.9	44.3	21.0	8.6	2.2
70～79 年卒	18.6	46.5	23.0	10.0	2.0
80～89 年卒	20.0	42.1	23.3	10.9	3.7
90～99 年卒	14.4	38.2	25.1	17.6	4.7
2000～09 年卒	19.7	38.9	22.4	13.9	5.1

(2) 関学の OB・OG であることをよく意識する

全体では、「とてもあてはまる」が 22.3%、「まああてはまる」が 44.8%であり、肯定的な意見を合わせると、67.1%となる。逆に「あまりあてはまらない」は 11.1%、「あてはまらない」は 2.7%であり、否定的な意見を合わせると、13.9%である。肯定的な意見が否定的な意見の約 5 倍に達している。

性別の違いに注目すると、男性は「とてもあてはまる」が多く (+6.3 ポイント)、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」が少ない。

年代別では、「とてもあてはまる」は 60 年代卒で高く、続いて 80 年代卒、2000 年代卒となっている。「まああてはまる」は 90 年代卒、2000 年代卒がやや少ない。そして「あまり

「あてはまらない」は90年代卒、2000年代卒でやや多く、15%を超えている。また「あてはまらない」も若干若い世代で高くなっている。

表 11.2 大学への思い／関学のOB・OGであることをよく意識する

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
全 体	22.3	44.8	19.0	11.1	2.7
男性	25.2	47.6	16.4	7.8	2.9
女性	18.9	41.5	22.1	15.0	2.5
60～69年卒	27.4	47.9	14.8	8.5	1.3
70～79年卒	20.0	50.5	19.6	8.0	2.0
80～89年卒	23.7	46.0	18.4	9.5	2.5
90～99年卒	18.4	38.8	23.1	15.2	4.5
2000～09年卒	23.5	39.2	18.4	15.5	3.5

(3) 関学の人たちが好きだ

全体では、「とてもあてはまる」が26.1%、「まああてはまる」が47.8%であり、肯定的な意見を合わせると、73.9%となる。逆に「あまりあてはまらない」は2.9%、「あてはまらない」は1.3%に過ぎず、否定的な意見を合わせても、4.3%に過ぎない。肯定的な意見が否定的な意見の約17倍にまで達している。

性別の違いに注目すると、ほとんど性別による違いはないが、若干女性は「とてもあてはまる」の比率が高く、「どちらでもない」の比率が低い。ただほとんど差はない。

年代別に見ても、あまり大きな違いはない。どの年代も肯定的な意見が多く、否定的な意見が少ない。

表 11.3 大学への思い／関学の人たちが好きだ

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
全 体	26.1	47.8	21.8	2.9	1.3
男性	25.0	48.2	22.8	2.8	1.2
女性	27.3	47.4	20.7	3.1	1.5
60～69年卒	25.0	48.7	23.4	1.9	0.9
70～79年卒	19.0	51.8	24.7	2.9	1.6
80～89年卒	25.8	48.2	22.1	2.9	1.0
90～99年卒	28.3	45.7	21.1	3.2	1.7
2000～09年卒	34.6	43.6	17.0	3.5	1.3

(4) 関学を卒業したことを誇らしく感じている

全体では、「とてもあてはまる」が39.9%、「まああてはまる」が46.3%であり、肯定的な意見を合わせると、86.2%に達している。逆に「あまりあてはまらない」は2.2%、「あてはまらない」は0.8%に過ぎず、否定的な意見を合わせても、3.1%に過ぎない。大部分の卒業生が誇らしく感じていることがわかる。

性別による違いは、あまりないが、若干「とてもあてはまる」の比率が、女性のほうが男性よりも高い。ただ大きな差ではない。

年代別では、若い世代ほど「とてもあてはまる」の比率が高く、「まああてはまる」の比率が低い、肯定的な意見の比率はどの世代も9割近い。

表 11.4 大学への思い／関学を卒業したことを誇らしく思う

	とてもあてはまる	まああてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
全 体	39.9	46.3	10.7	2.2	0.8
男性	38.6	46.8	11.5	2.2	0.9
女性	41.5	45.7	9.8	2.3	0.7
60～69年卒	38.0	48.1	11.7	2.2	0.0
70～79年卒	35.4	48.8	12.7	2.0	1.2
80～89年卒	40.8	48.9	8.5	1.2	0.6
90～99年卒	40.7	44.4	11.4	2.5	1.0
2000～09年卒	45.9	40.0	9.3	3.7	1.1

(5) 関学に愛着を持っている

全体では、「とてもあてはまる」が40.1%、「まああてはまる」が47.0%であり、肯定的な意見を合わせると、87.2%に達している。逆に「あまりあてはまらない」は2.5%、「あてはまらない」は0.7%に過ぎず、否定的な意見を合わせても、3.2%に過ぎない。大部分の卒業生が関学に愛着を抱いていることがわかる。

性別の違いは、ほとんどなく、男女問わず愛着を抱いている。

年代別では、若い世代ほど「とてもあてはまる」の比率が高く、「まああてはまる」の比率が低くなっている。しかし、両者をあわせた肯定的な意見の比率は、60年代卒が88.3%、2000年代卒が86.4%とほとんど違いがない。

表 11.5 大学への思い／関学に愛着をもっている

	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	あてはまらない
全 体	40.1	47.0	9.6	2.5	0.7
男性	40.4	47.2	9.3	2.4	0.6
女性	39.8	46.8	9.9	2.7	0.7
60～69 年卒	37.0	51.3	9.2	2.2	0.3
70～79 年卒	36.2	49.3	11.4	2.5	0.6
80～89 年卒	41.4	48.5	7.2	2.5	0.4
90～99 年卒	41.7	44.2	9.9	2.5	1.7
2000～09 年卒	44.8	41.6	10.4	2.9	0.3

(6) できるなら関学に関係ある人と関わりたい

全体では、「とてもあてはまる」が 15.7%、「まああてはまる」が 27.7%であり、肯定的な意見を合わせると、43.3%である。逆に「あまりあてはまらない」は 10.2%、「あてはまらない」は 5.6%であり、否定的な意見を合わせると、15.8%であり、肯定的な意見が否定的な意見の約 2.8 倍に達している。

性別の違いに注目すると、男性のほうが女性よりも肯定的な意見が多い。「とてもあてはまる」は 3.7 ポイント、「まああてはまる」は 3.5 ポイント高く、肯定的意見全体の比率では、7.2 ポイント男性のほうが比率が高くなっている。

年代別では、60 年代卒、70 年代卒は「どちらでもない」が多く、肯定的、否定的意見のどちらも多くない。80 年代卒、2000 年代卒は肯定的意見が多い。ただ 80 年代卒は否定的意見が少ないが、2000 年代卒は否定的意見も多い。90 年代卒、2000 年代卒は他の年代よりも、肯定的意見と否定的意見に別れている。

表 11.6 大学への思い／できるなら関学に関係ある人と関わりたい

	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	あてはまらない
全 体	15.7	27.7	40.9	10.2	5.6
男性	17.4	29.3	40.4	8.4	4.5
女性	13.7	25.8	41.5	12.3	6.7
60～69 年卒	13.0	28.5	46.5	8.2	3.8
70～79 年卒	11.4	24.5	49.5	9.8	4.9
80～89 年卒	18.4	30.4	40.0	6.6	4.6
90～99 年卒	14.9	27.5	36.5	12.9	8.2
2000～09 年卒	21.1	28.0	30.4	14.1	6.4

(7) 関学に思い入れがある

全体では、「とてもあてはまる」が26.4%、「まああてはまる」が43.7%であり、肯定的な意見を合わせると、70.0%である。逆に「あまりあてはまらない」は6.1%、「あてはまらない」は1.4%に過ぎず、否定的な意見を合わせても、7.8%であり、肯定的な意見が否定的な意見の約8倍に達している。

性別による違いは、男性のほうが女性よりも「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の比率が高い。

年代別では、若い世代のほうが肯定的な意見が多く、「どちらでもない」という意見が少ない。例えば60年代卒は26.8%が「どちらでもない」と回答しているが、2000年代卒では14.9%に過ぎない。

表 11.7 大学への思い／関学に思い入れがある

	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	あてはまらない
全 体	26.4	43.7	22.1	6.4	1.4
男性	29.1	44.8	20.3	4.5	1.3
女性	23.2	42.4	24.3	8.6	1.4
60～69年卒	24.3	41.3	26.8	6.3	1.3
70～79年卒	20.7	43.6	28.2	6.7	0.8
80～89年卒	29.1	43.9	19.8	5.6	1.6
90～99年卒	26.6	44.8	20.4	6.5	1.7
2000～09年卒	32.0	44.3	14.9	7.2	1.6

(8) 関学のOB・OGには、いい人が多いと思う

全体では、「とてもあてはまる」が18.4%、「まああてはまる」が42.0%であり、肯定的な意見を合わせると、60.4%である。逆に「あまりあてはまらない」は3.0%、「あてはまらない」は1.1%に過ぎず、否定的な意見を合わせても、4.1%である。「どちらでもない」が35.4%と多いことが特徴的である。

性別による違いを見ると、男性のほうが女性よりも若干肯定的な意見が多い。

また年代別では、60年代卒から80年代卒において、若干肯定的な意見が多いが、あまり大きな違いではない。また80年代卒の世代では、「どちらでもない」の比率がやや高くなっている。

表 11.8 大学への思い／関学のOB・OGには、いい人が多いと思う

	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらと もいえない	あまり あてはまらない	あてはまらない
全 体	18.4	42.0	35.4	3.0	1.1
男性	19.5	43.0	34.3	2.3	1.0
女性	17.2	41.0	36.8	3.7	1.3
60～69年卒	18.9	43.8	33.4	2.8	0.9
70～79年卒	16.5	45.7	32.9	3.7	1.2
80～89年卒	18.4	43.3	35.5	1.9	1.0
90～99年卒	15.6	41.9	38.5	2.5	1.5
2000～09年卒	23.7	34.0	37.2	4.0	1.1

(9) 関学のOB・OGであることをうれしく思う

全体では、「とてもあてはまる」が32.7%、「まああてはまる」が52.6%であり、肯定的な意見を合わせると、85.3%である。逆に「あまりあてはまらない」は1.5%、「あてはまらない」は0.6%に過ぎず、否定的な意見を合わせても、2.2%である。大部分がうれしいと感じていることがわかる。

性別による違いを見ると、ほとんど違いがない。

年代別に見ても、違いはない。

表 11.9 大学への思い／関学のOB・OGであることをうれしく思う

	とても あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	あてはまらない
全 体	32.7	52.6	12.6	1.5	0.6
男性	32.7	51.7	13.2	1.5	0.8
女性	32.6	53.6	11.8	1.5	0.4
60～69年卒	31.2	54.9	12.0	1.9	0.0
70～79年卒	28.9	55.5	13.3	1.4	1.0
80～89年卒	34.2	53.2	10.9	1.0	0.6
90～99年卒	32.5	51.1	13.9	1.7	0.7
2000～09年卒	37.2	47.6	12.8	1.9	0.5